

卒業制作・論文作品集 18

畿央大学健康科学部
人間環境デザイン学科
2023

The 18th Graduation Works & Theses
Department of Environmental Design
Faculty of Health Sciences
Kio University

ご挨拶

第18回卒業制作・論文作品集には、この春卒業する人間環境デザイン学科の皆さんによる卒業制作と論文の作品が収録されています。

卒業研究(制作)で皆さんは、解決ニーズがある問題や環境も含めた新たな「もの」を作り出すことに挑戦されました。

デザインの究極の目的は建学の精神の「美をつくる」に示される、人々に感動を与え、心を豊かにすることです。

デザインの対象を表現するときは、バーチャルな仮想空間と物理的な現実空間を融合した世界に、ありたい姿を描きます。発表ではソフトウェアツールを駆使してありたい姿を上手に示していることが印象に残りました。

発表で大切なことは、発表内容が論理的に組み立てられた提案や新規性のある「もの」であり、それらは容易に理解できました。

卒業される皆さんは、情報革命がさらに急激に進展する未来社会の中で、幅広いデザインの分野で活躍されることになります。AIで替われない感性・知性を磨き続け、表現力を高め、さらに成長されることを期待します。

この作品集は、お一人おひとりが大学でのデザイン活動の卒業時点での「スナップショット」です。何年か先にこの作品集を開くことがあれば、その時にはご自身の成長したことへの感懐を抱かれ、同時に学友の顔を懐かしく思い起こすでしょう。

最後に、卒業に至るまで皆さんのお一人おひとりの個性を尊重してご指導いただいた先生方にお礼を申し上げますと共に、卒業後も引き続き良き絆を保たれることを願ってご挨拶いたします。

畿央大学 学長

冬木 正彦

- 8 学長賞 永井 里歩 一生の藍 ～特別な一日が一生を着飾るドレス～
- 12 優秀賞 吉井 亮徳 新中之島図書館
- 14 優秀賞 山崎 優美 昭和戦後期における法隆寺門前町の形成過程に関する研究
- 16 作業風景

● Works ●

- 18 入選 青木 佑夏 駅を居場所に ～大規模商業施設の片隅で～
- 19 阿舎利 陽菜 いつも9°傾いている腰にやさしい作業椅子
- 20 入選 油谷 圭輝 Doctor's village
- 21 石田 風歌 どうくつ幼稚園
- 22 今村 水紀 Smile Kio Arena
- 23 上出 那奈実 いぬとひと ただいっしょにいること ただゆっくりすぎるとき
- 24 入選 岡田 ひなた Holographic Theater
- 25 岡村 夢真也 music library
- 26 奥野 菜花 高架というひとつの大屋根 ～地域の人々の集いの場～
- 27 角野 歩希 市民の溜まり場となる公民館
- 28 大石 和 ワンルームマンションの分解 ～新しいひとり暮らし～
- 29 梶原 彩香 三つ目の居場所 ～地域のための学び舎～
- 30 春日 涼太 Transform
- 31 入選 川口 蒼真 古都の風ふく駅
- 32 切島 温子 蓮の湖を望む
- 33 後久 まどか 残糸からジャケットに ～斜めに織り込む4色の色～
- 34 櫻井 香織 住人十色な小屋住宅
- 35 末吉 菜結 私と手仕事 ～シルクとチューリップを纏って～
- 36 杉田 美咲 紡築 ～日本伝統家屋の新しい住み継ぎの提案～
- 37 瀬山 采加 Follies of Avogado6
- 38 高山 凌花 Co-LearningSpace for small University and College
- 39 谷口 遥香 NARAのURAをRENEWAL ～奈良の食を学ぶ場所～
- 40 田原 健 畳の上の座椅子 ～現代的座り心地の良さとは～
- 41 丹野 紗波 自然と結ぶ ～人と自然が交わる町～
- 42 鶴見 綾乃 ウツワウス 一子育て・子育てのための共生型集住一
- 43 榎野 歩未 一生手元におきたい佐賀錦 ～日本茜を取り入れて～
- 44 入選 土橋 歩波 今井町長屋活用のすすめ
- 45 中出 華奈子 残りものの魔法 ～残糸を活用したウエディングドレス～
- 46 中村 悠真 playerたちのundergroundnoise ～esportsとHIPHOPの50年～
- 47 西島 由夏 介護付きシェアハウス
- 48 入選 平岡 初音 人間環境デザイン学科卒業研究 会場計画
- 49 入選 平田 晴輝 残糸の活用に関する研究 ～黒になるまでの軌跡～

- 50 入選 廣岡 冨香 棚にもなる椅子とサイドテーブル
- 51 福井 晨人 ～京終モノづくりタウン～
- 52 入選 福嶋 涼介 綿とグリアから着物へ ～奈良で生まれたものをカタチに～
- 53 藤原 彩那 自給自足による Asuka 縁食堂
- 54 部原 夕海 佐賀錦で海を表現する ～大切な日を守る鞆の制作～
- 55 入選 前野 風香 Naniwabashi Live-House Complex
- 56 松上 萌 木漏れ日のある駅
- 57 入選 松田 歩 保護犬の故郷 ～犬の保護・訓練・譲渡施設～
- 58 入選 松本 紗弥 誰もが使える入浴着を目指した改良 ～身近な若年層をきっかけに～
- 脇田 うた
- 59 水谷 立命 ユニセックスで着用できるジャケットの提案 ～この藍を墨々に～
- 60 森本 陽大 集いの場
- 61 山岸 美月 コミュニティツーリズム in 旧今立町 ～みて きて くれる～
- 62 山口 桃穂 足下にも彩りを —残糸を用いたラグ制作—
- 63 山田 夏実 Musik Kashi Park —音楽×まち×人を繋ぐ交流の場—

64 作業風景

• Theses •

- 66 追田 奈菜 旧奈良鉄道樺本駅舎の建築的特徴および変遷過程について
- 67 向井 勇大 入浴着に使用されている生地素材評価に関する研究
—入浴着の素材と残留石鹼との関係を中心として—
- 68 上西 剛己 近くて遠い隣まちからちょっと知っている隣町へ
～3年目のケーススタディ～
- 69 奥山 龍介 大規模建造物跡地の転用手法と周辺環境との関係
—野球場跡地を対象に—
- 70 梶原 百華 イームズ邸におけるインテリアエレメントの特質
- 71 河口 歩夢 夏季における就寝時も暑熱対策の時代変化
- 72 河田 彩乃 明治時代後期における商業施設の外観デザインに関する研究
- 73 小林 隆斗 執務者のウェルネス向上にむけた事例調査
～新社屋をより良いものにするために～
- 74 入選 堤 清玲 竹家具からみる近代日本家具の過渡的状況
- 75 久井 小瑛 藤原 未唯 オープンキャンパスのバナーにおける蛍光色に対する印象評価
- 76 入選 福田 莉奈 南 成明 若年男性の生理反応と冷え性判断基準の関係
- 77 入選 正岡 凜保 空き家の活動団体と地域コミュニティの関わりについて
—空き家対策モデル事業に採択された近畿圏内の12団体を事例として—
- 78 増田 昌哉 1970年までに民間開発された住宅団地に関する研究
—奈良県内の住宅団地を事例に—
- 79 松實 大智 暑熱環境における快適な気流条件

•Winning a prize•



永井 里歩
Riho Nagai

村田ゼミ

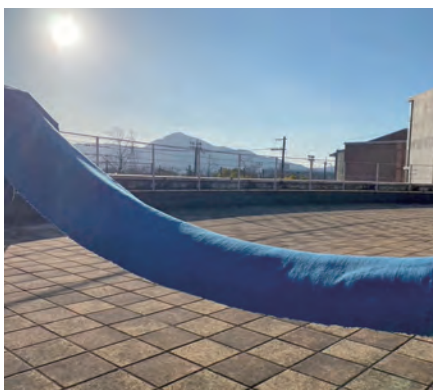
— 学長賞 —

一生の藍 ～特別な一日が一生を着飾るドレス～

ガラ紡機で紡いだ糸ならではの風合いと、藍染めの鮮やかさを最大限に活かしたデニムのドレスを制作。

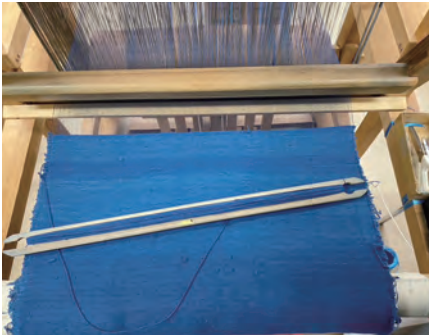
1着でお色直し後も自由自在に楽しめる工夫を詰め込んだ。

そして、ドレスとして着用した後は、私服に取り入れ、着る度にその日の思い出や気持ちが蘇る。

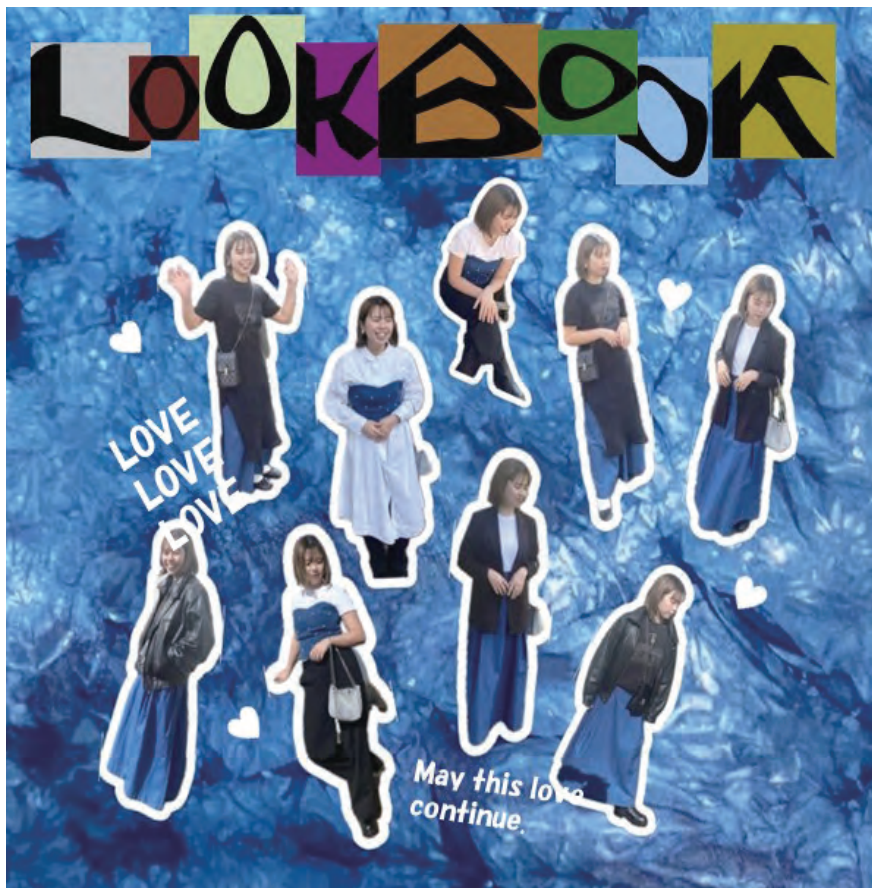


糸染めと布染めを上手く取り入れることで、ガラ紡機と藍染めの良さを最大限活かしたドレスになった。

オーバースカートはリバーシブル仕様、取り外し可能となっており、3パターンのドレスへと変化する。リバーシブルにすると、藍で籠染めた美しい柄が広がる。取り外すと、Aラインのドレスとなり綺麗な身体のラインが表現できる。



ガラ紡機



上下セパレート仕様となっているため、ドレスとして着た後は日常に取り入れることができる。着る度に、その日の思い出や気持ちを蘇らせることで、その愛は一生続いていく。

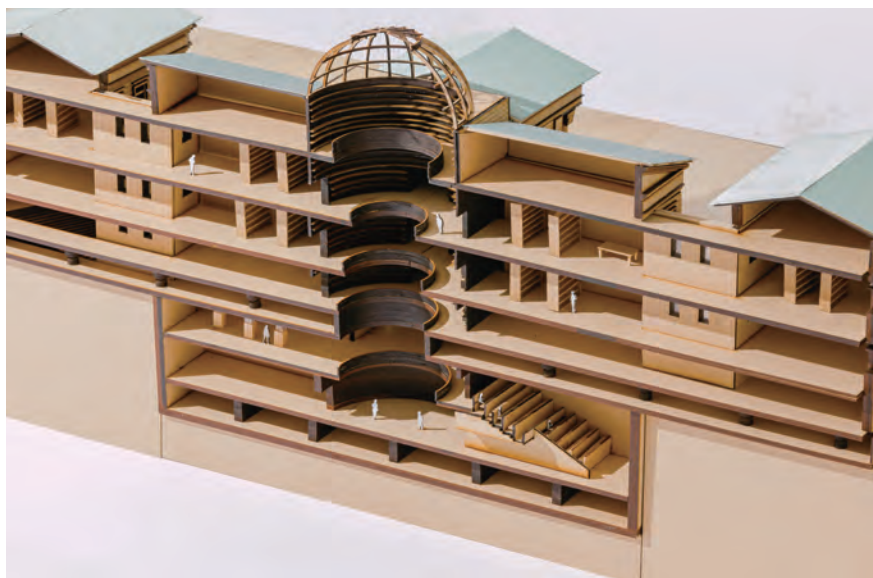
受章のことは

この度は学長賞という光栄な賞を頂きましたことを大変嬉しく思います。

この1年間、卒業制作以外の面でも本当に忙しく、最後までやり切ることができるか不安でいっぱいでしたが、最後までご指導して下さった村田先生、一緒に頑張った村田ゼミ生やデザイン学科の友達、支えてくれた家族、そしてこの作品を作るにあたってご協力頂いた方々、私に関わる全ての方々のおかげでこのような賞を頂くことができました。

この作品は4年間の様々な学びの集大成となったとともに、成果よりもっと大切なものを学べる機会にもなりました。

素敵な4年間、本当にありがとうございました。

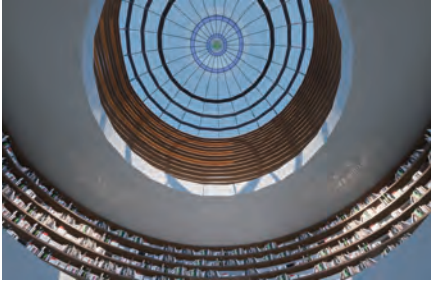


—優秀賞—
新中之島図書館

吉井 亮徳
Ryotoku Yoshii

三井田ゼミ

大阪が産業や経済的に発展した「大大阪時代」を象徴する中之島図書館。そこに保管されている貴重書や古書を一般公開することによって大阪の魅力や文化、歴史を発信する図書館。





— 優秀賞 —

昭和戦後期における法隆寺門前町の形成過程に関する研究

山崎 優美

Yumi Yamazaki

前川ゼミ

〈目的〉

本研究では世界最古の木造建築群の一つであり、1993年に日本初の世界文化遺産に登録された法隆寺の門前(図1)を研究対象とする。小規模な茶店が建っていた明治初期から店舗やホテルが建ち並び昭和戦後期まで、観光地として門前町が形成される過程を明らかにする。また、法隆寺門前は1966年に制定された古都保存法により積極的整備が行われた最初期例であることが分かった。古都保存法は「歴史的風土」を後世に引き継ぐべき国民共有の文化的資産として適切に保存するためにうまれた法律であるが、歴史が承継されてきた景観が壊されているという課題もうまれた。これが適用された最初期の事例である法隆寺門前の整備経過を検証することで古都保存法の課題と可能性も明らかにする。



図1 研究対象地：法隆寺門前
(出典：『斑鳩町史 上巻』考古編p164)

〈方法〉

- ① 近世の法隆寺周辺地域の形成過程、また、近世、近代以降の法隆寺門前の形成過程を古地図、航空写真、ヒヤリング、土地台帳、奈良県庁文書の資料による分析によって明らかにする。
- ② 古都保存法の斑鳩町適用によって行われた整備計画内容を、斑鳩町所蔵の斑鳩町

会議録、計画図によって明らかにする。また、その整備に対する地元住民の反対運動、それに対する斑鳩町の対策についても斑鳩町会議録の資料より、まとめる。古都保存法による整備によって完成した現在の近代的な門前の意義と課題をまとめ、今後行っていくべき門前形成を考える。

〈法隆寺門前形成過程〉

本研究により、近代以降の法隆寺門前の形成過程が明らかになった。法隆寺門前は、戦後直後は松並木のある参道だけで建物は南大門周辺に密集していた(図4①)。1940年代後半、車社会の発展により、松並木を分断する形で国道25号線が通り、参道西側に道が1本通った(図4②)。1950年代後半には松並木の参道沿いに大型駐車場が造られた(図4③)。1966年に斑鳩町に古都保存法が適用されてから大きく門前形成が動いた。古都保存法による全国で唯一の積極保存計画であったことから、地元住民による反対運動も行われながらも1960年代後半に整備が開始された。古都保存法による計画は大きく街路事業、広場整備、駐車場整備の3つがある。街路事業は国道25号線から法隆寺への見通しをよくするために、法隆寺門前の52mの街路を、松並木参道に沿ってその両側に、幅5.0mの低木植え込み(図2①)、幅7.0mの車道(図2②)、幅7.0m歩道(図2③)の3つの帯で整備する計画である(図2)。南大門前広場整備は、計画図(縮尺1/500)(図3)から、参道並木松の延長線になぞって広場中央と、広場両側を囲むように樹林の植え込みが計画された。店舗の移転が施行され、2005年ようやく現在の門前形成が完成した(図4④)。

〈整備計画の意義・課題〉

古都保存法の整備により、荘重で近代的な景観となった法隆寺門前は、景観面、住民

生活面、観光面で整備計画の意義が確認された。整備前の左右非対称で乱れた状態だった門前は整備により近代的な景観として整えられながらも、参道中央には1261年から残る松並木が保存された。近代性と歴史性が共存した計画といえよう。幅7.0mと非常に広い歩道沿いには店舗が並び、店舗に並列して駐車場整備も行われた。このように、景観保全、観光産業の発展、交通面での地元住民の利便性向上及び安全確保が整備計画の意義であるといえる。

一方で、歩道沿いの大型店舗や大型駐車場、車が行き交う参道は、世界遺産をもつ法隆寺の門前として相応しくないという課題も依然として確認できる。

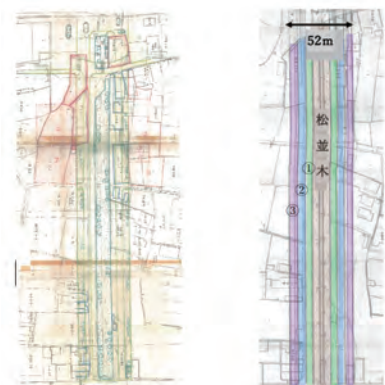


図2 「都市計画事業 法隆寺門前線実測平面図 縮尺1/500」
(出典：『昭和44年地域開発特別委員会』)

法隆寺門前に現在建てられている大型店舗は、1972年に適用された用途地域の規定内で建築された。その後、1996年に用途地域が第一種低層住居専用地域に変更され単独の店舗が建築不可能と制限された。大型店舗が建てられた後に、大型店舗が本地に相応しくないと判断されていたことが分かる。しかし、2014年に法隆寺周辺地区特別用途地区が指定され、現在の門前では制限緩和により店舗やホテルが建築可能であることが明らかになった。

〈今後の門前形成〉

こういった整備計画の意義と課題を踏まえると、今後の門前形成において、近代的な観光地整備と歴史的風致の保存のあるべき関係性についてはさらなる検討が必要であろう。大型店舗を建てない、参道沿いに駐車場を設置しない、松並木参道の両側の車道は参拝者が多く訪れる時間帯は車の走行を禁止するといった対策をすることで、近代的な観光地整備と歴史的風致の共存がさらに可能になると考える。

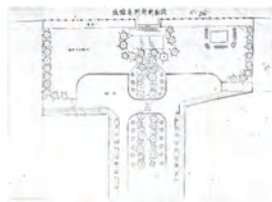


図3 広場構想図
(出典：『昭和44年地域開発特別委員会』)

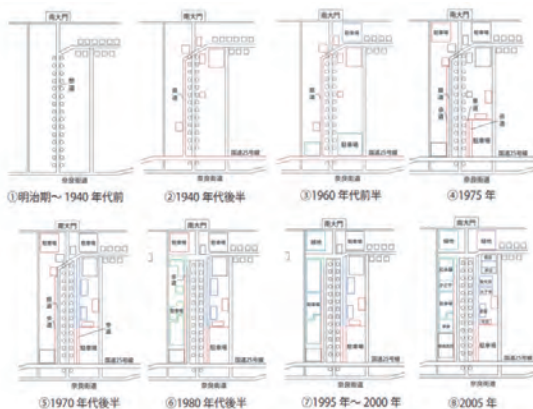


図4 近代以降の門前形成

作業風景





• Works •



青木 佑夏
Yuka Aoki

林田ゼミ

駅を居場所に ～大規模商業施設の片隅で～

近隣住民や訪れる人々にとって「居場所」とは、快適に心地よく過ごしてもらうことに価値があるのではないか。建設予定の大型商業施設前モノレール駅を交通手段としての利用だけでなく、人々の居場所となる駅に。

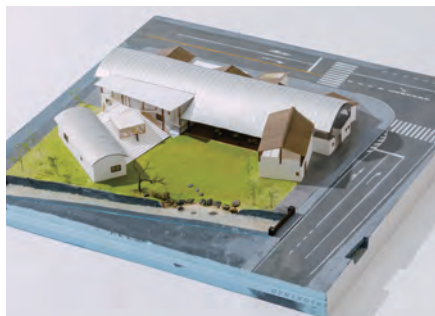


阿舍利 陽菜
Haruna Azeri

林田ゼミ

いつも9°傾いている腰にやさしい作業椅子

1日約7時間を座って過ごし、世界有数の腰痛大国といわれている日本。そんな問題を解決することができる作業椅子を制作した。座面を9°前傾させることで骨盤が立ち、正しい姿勢を保つことで腰痛を防ぐ。

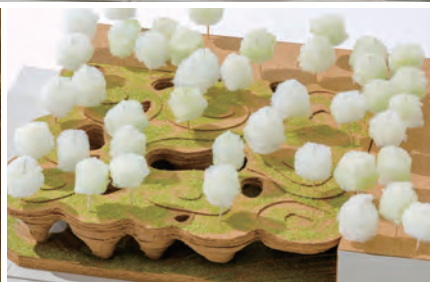


Doctor's village

油谷 圭輝
Keiki Aburatani

三井田ゼミ

開業医の閉院が相次いでいる宇陀市大宇陀で様々な診療科とデイサービスを併設させ、高齢化や疾病構造の変化に対応し、医療と福祉サービスを連携して提供できる、かつ併存疾患を持つ高齢者が一か所で複数の診療を行える診療所を設計した。

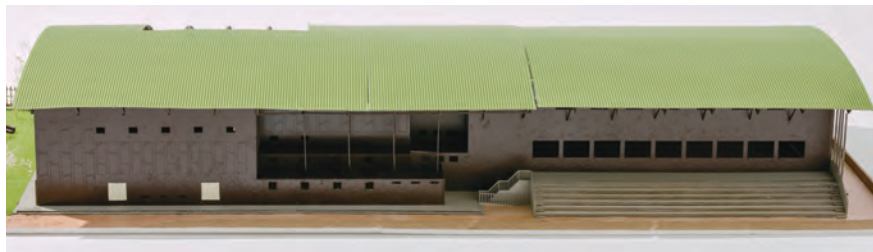
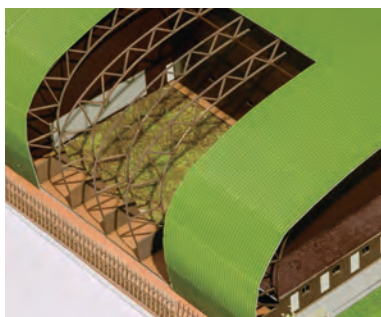


石田 風歌
Fuka Ishida

藤井ゼミ

どうくつ幼稚園

街の中で異彩を放つ洞窟は、子どもたちのための空間。
カーブした床、ごつごつとした壁、穴から降り注ぐ光と雨、
全てが子どもたちにとっての遊び場だ。
ここで育った子どもたちは、自然の美しさと、危険対処を身につける。



Smile Kio Arena

今村 水紀
Mizuki Imamura

三井田ゼミ

畿央大学 第二キャンパス。その存在を知らない生徒は多い。
殺風景で広大な土地を活気ある場所へと変える。
観客席や芝生があり、憩いの場として集える体育館を制作した。

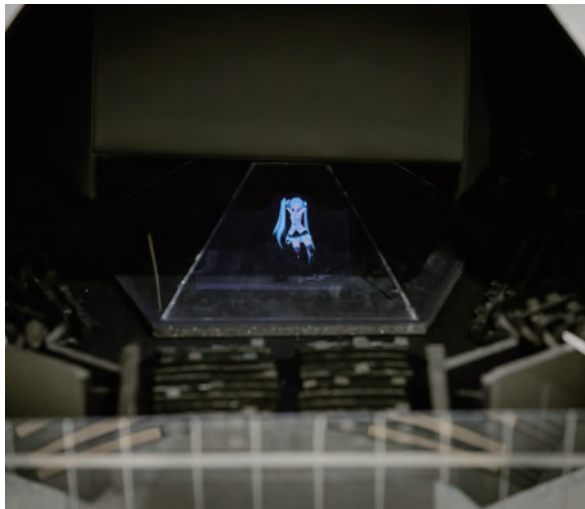
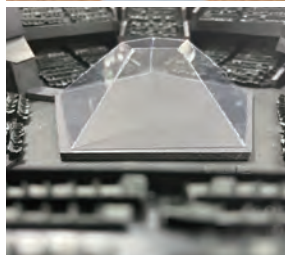
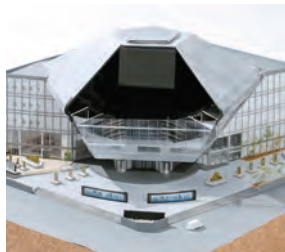
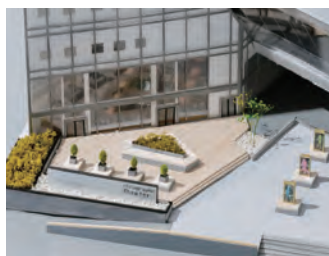


上出 那奈実
Nanami Uede

林田ゼミ

いぬとひと ただいっしょにいること ただゆっくりすぎるとき

犬がいることで、行きたくなる場所、楽しい場所として存在し、
施設的空間と思わせない一つの居場所を計画。
セラピードッグの認知度をあげ、少しでも多くの被災犬を救う。

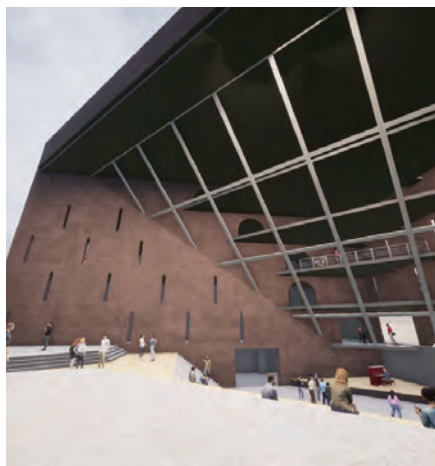


岡田 ひなた
Hinata Okada

藤井ゼミ

Holographic Theater

近年注目を集めている最新技術の一つである、3Dホログラム技術を活用した新感覚の音楽ライブによって、デジタルコンテンツをより身近に感じることができる世界初の全方向ホログラム専用音楽ホールを設計した。



岡村 夢真也
Yumaya Okamura

三井田ゼミ

music library

現在、国内には由緒ある資料が多く並ぶ音楽図書館が存在するが、日々進化する音楽シーンにはもっと日常に近いものが必要だと感じた。計画地のアメリカ村は根強いHIPHOP文化が存在する。そのため、レコードを中心とした「library」を設計した。



奥野 菜花
Nanoka Okuno

林田ゼミ

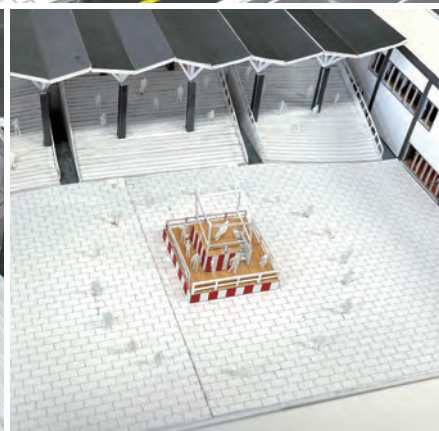
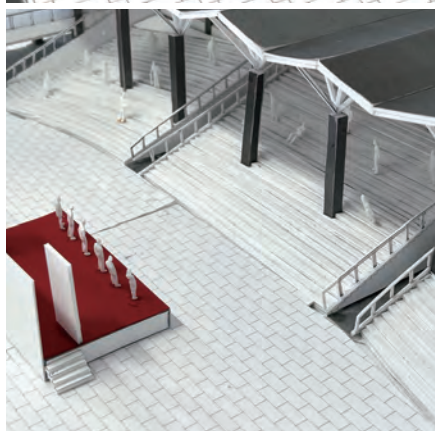
高架というひとつの大屋根 ～地域の人々の集いの場～

ただ柱脚が立ち並んでいるだけの高架下に、温もりと明るさを。

そして、人々が訪れたい空間へ。

また、地域の人々が集まる場がない泉大津市。

そこで、泉大津市が目指している健康増進に因んで地域の人々の集いの場を。

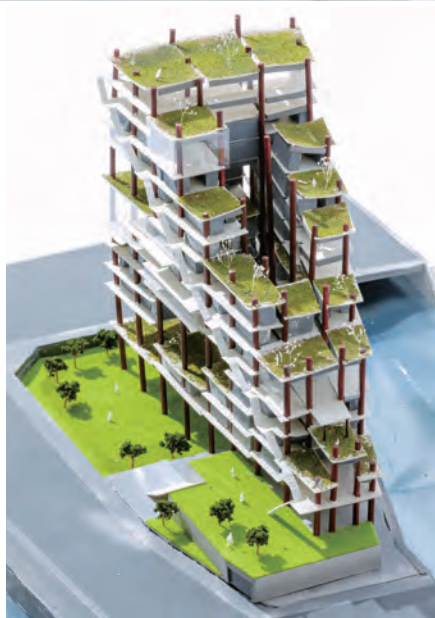
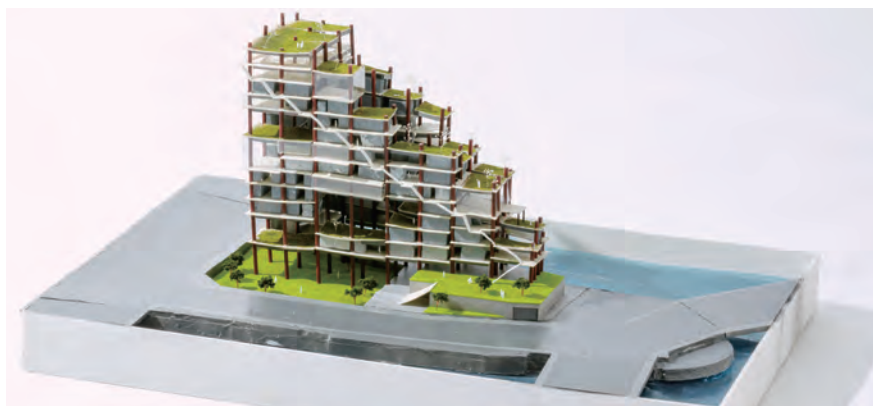


角野 歩希
Ibuki Kakuno

三井田ゼミ

市民の溜まり場となる公民館

今では需要のない多目的な公民館を目的を持って訪れる生涯学習センターに建て替えることで、学生から高齢者まで様々な年齢、立場の人がそれぞれに応じた目的を持ってこの建物に訪れる事ができるようにしました。

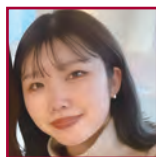


大石 和
Yamato Oishi

前川ゼミ

ワンルームマンションの分解 ～新しいひとり暮らし～

独居によるコミュニケーション減少等の問題を1980年代頃から普及し始め約40年間常態化しているワンルームマンションの形態にあると捉え、この仕組みを解体し、今までにないコミュニティ発生場として再構築する。



梶原 彩香
Ayaka Kajiwara

林田ゼミ

三つ目の居場所 ～地域のための学び舎～

地域コミュニティの場である学校の廃校が増加する中、地域のつながりが薄くなり、人との距離も遠くなっている。そこで廃校舎を利活用し、家でも学校でも職場でもない、地域の人が集まる三つ目の新たな居場所を提案する。

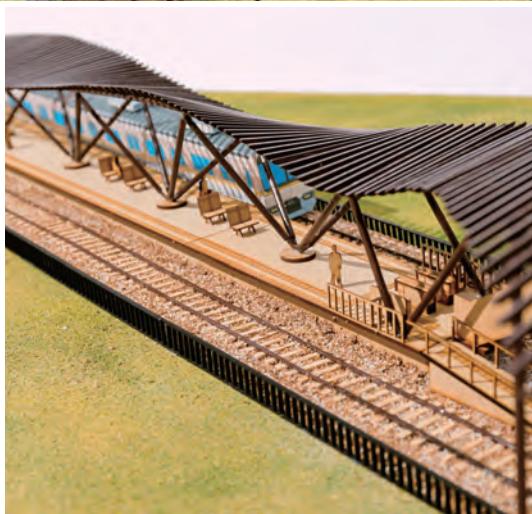


Transform

春日 涼太
Ryota Kasuga

前川ゼミ

人口減少や市場縮小により、地域のコミュニティが課題となる中、経済成長ではなく、安定性が重視されている。ここ数年で働き方が変化し、家庭内での暮らし重視が進む中、身の丈に合った小商いは強みとなる。そして今回、小商いを設計する。



川口 蒼真
Soma Kawaguchi

三井田ゼミ

古都の風ふく駅

奈良時代を象徴する遺跡の一つとして奈良市にたたずむ「平城宮跡」。しかしそこは近鉄線が通るだけで、平城宮跡を知らない・気づかず通り過ぎる人も多い。そこで魅力を伝えるきっかけとして、新たな駅を提案。駅を降りるとそこには古都の風が吹く。



切島 温子
Atsuko Kirishima

藤井ゼミ

蓮の湖を望む

7年前全滅した美しい蓮の群生地。この地に展蓮台が蓮の湖復活への願い、その象徴として在り続ける。地下は光が差し込み、地上部は様々な高さを持つ。そして、ここからもう一度伸び渡る蓮の湖を望みたい。



後久 まどか
Madoka Gokyu

村田ゼミ

残糸からジャケットに ～斜めに織り込む 4 色の色～

靴下の製造工程で廃棄される残糸の活用幅を広げるのを目的に綾織のジャケットを制作した。平織でなく、綾織で織ることによって、地合いはふくらみがあり、やわらかく、シワになりにくいジャケットに仕上げることができた。



櫻井 香織
Kaori Sakurai

陳ゼミ

住人十色な小屋住宅

趣味や仕事の空間を小屋で過ごすことができる住宅街で「小屋のある暮らしを通して新たな住民生活空間」の提案。小屋が作り出す町並み・景観がどのようなものになるのか。



末吉 菜結
Nayu Sueyoshi

村田ゼミ

私と手仕事 ～シルクとチューリップを纏って～

日常生活では縁遠い和服・絹・草木染め。
今回はそれらを身近にする「洋服のように着ることのできる和服」の提案。
チューリップ染めの優しい色合いと絹糸の美しさ、
真綿糸の柔らかさを存分に生かした。
今回はスカートだが、何を合わせるかは人それぞれである。



杉田 美咲
Misaki Sugita

前川ゼミ

紡築 ～日本伝統家屋の新しい住み継ぎの提案～

0から生み出す新築や躯体を1と取られたドラスティックなリノベーションではなく、過去の気配をグラデーションのように継ぐ設計手法が必要ではないだろうか。住人の軌跡が集積された築90年の日本家屋を対象に新たな価値を生む住み継ぎの提案を行う。

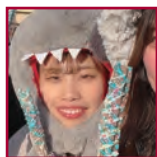
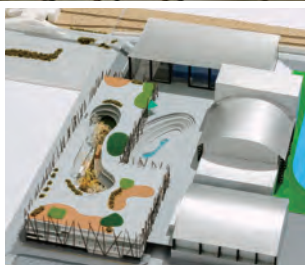
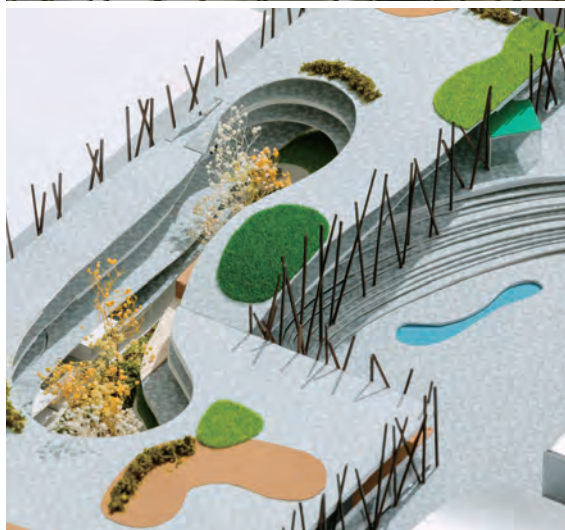


瀬山 采加
Ayaka Seyama

藤井ゼミ

Follies of Avogadro6

ネットを中心に活躍する正体不明のクリエイター、アボガド6。人々が抱える閉塞感や生きづらさをより加速させるような、しかし共感し寄り添い後押しするような、そんな彼の作品を実際に体感できるような建築をつくる。

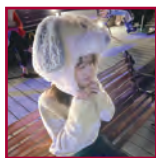
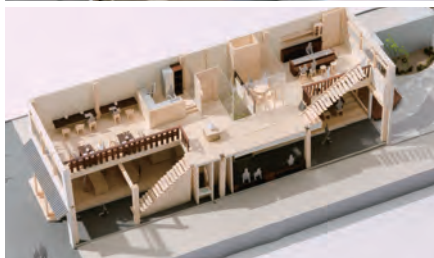
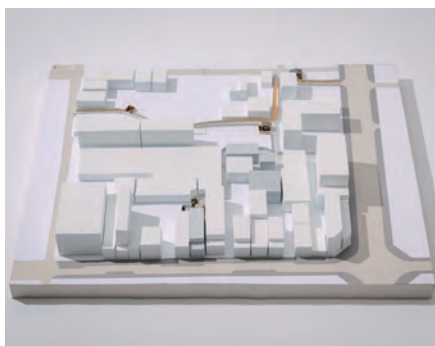


高山 凌花
Ryoka Takayama

藤井ゼミ

Co - LearningSpace for small University and College

大学は生き残りを争う時代に突入している。小規模大学が独自には持ちえない、しかし学生にとっては必要な施設を共同で設立する。そこは学生交流・共同授業や研究・式典や発表の場であり、共同クラブ活動の場でもある。

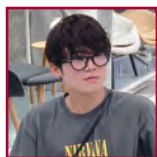


谷口 遥香
Haruka Taniguchi

林田ゼミ

NARAのURAをRENEWAL ～奈良の食を学ぶ場所～

路地裏に続く、三条通りの空きビルリノベーション。
奈良の食を見て、触れて、学ぶ場所。
その奥には新たな面白さが広がることを知る。



田原 健
Ken Tahara

林田ゼミ

畳の上の座椅子 ～現代的座り心地の良さとは～

日本文化である畳の上での生活に適した家具が「座椅子」。現代の古民家リノベーションの現場でも座椅子はよく用いられる。そこで、畳の上での生活に適した、現代的座り心地の良さを目指し、長時間座っても疲れない座椅子を制作した。

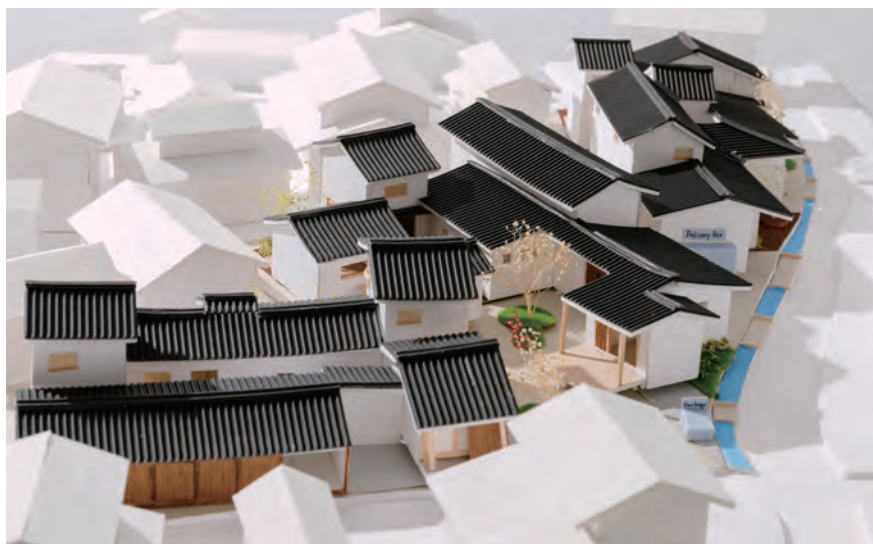


丹野 紗波
Sanami Tanno

前川ゼミ

自然と結ぶ ～人と自然が交わる町～

衰退したニュータウン。その中に自然と人をつなぐ小さな変化をつくり出す。
たったそれだけで町が変わり、人が変わる。
人のいない町を人と人、人と自然、たくさんの交流が行われる町に。



鶴見 綾乃
Ayano Tsurumi

陳ゼミ

ウツワウス 一子育て・子育てのための共生型集住一

近年、3世帯同居や専業主婦世帯から共働き世帯や母子家庭へというように「家族のかたち」が変化、多様化している。そこで、現代の私たちにあった「住まいのかたち」を考え、共生型の町営住宅の設計を行った。



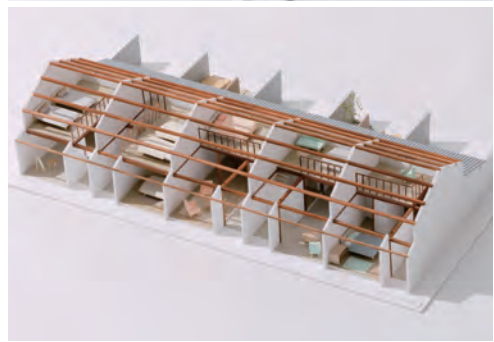
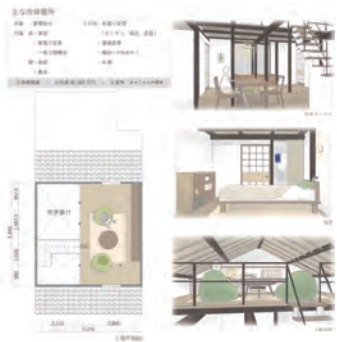
桐野 歩未
Ayumi Togano

村田ゼミ

一生手元におきたい佐賀錦 ～日本茜を取り入れて～

希価値の高い日本茜によって染めた緯糸で佐賀錦を織り、魅力的かつ相応しい形に。

佐賀錦の魅力を引き出すため平面での利用と、ハレの日を想起させる色合いから木箱としても使用できるリングビローを制作しました。



今井町長屋活用のすすめ

土橋 歩波
Honami Dobashi
三井田ゼミ

趣ある歴史的な町並みが特徴の今井町。
しかしその一方で、放置された空き長屋の存在も多数。
そこで空き家の持ち主や事業者へ向け、長屋の活用提案を載せたガイドブック
を制作した。



中出 華奈子
Kanako Nakade

村田ゼミ

残りものの魔法 ～残糸を活用したウエディングドレス～

靴下メーカーから出る残糸によるウエディングドレス。日頃廃棄される残糸も、工夫次第でトキメキ溢れるものへと変身する。上はビスチェとベアトップ、下はスカートに分かれているため、ウエディングドレスとして着た後も着回しができる。



中村 悠真
Yuma Nakamura

林田ゼミ

playerたちのundergroundnoise ～esportsとHIPHOPの50年～

中津高架橋下に期せずして生まれた都市の余白。
国道高架下という雑音 (noise) がひしめき合うこの場所に、
若者たちが新たな文化を生み出すundergroundを作る。



西島 由夏
Yuna Nishijima

藤井ゼミ

介護付きシェアハウス

「老後」の時間は、長い。

夫婦、兄弟姉妹、友達など複数人から入居し、その後ひとりになるまでの人数変化に“シェア/コネクト”が対応した。LDKを核にいくつかの個室が付属していて、それぞれの個室は隣のLDKに接続することができる。



平岡 初音
Hatsune Hiraoka

藤井ゼミ

人間環境デザイン学科卒業研究 会場計画

作品展示用パネルベースを設計・制作し、それを用いて、2023年度中之島中央公会堂卒業研究展の会場全体の展示計画を行う。分解組み立て可能な、可動式の展示用パネルベースで展示会での配置の変化を作るため2つのタイプを考えた。



平田 晴輝
Haruki Hirata

村田ゼミ

残糸の活用に関する研究 ～黒になるまでの軌跡～

靴下製造時に出る色も素材も異なるすべての残糸を、汎用性のある黒色にすることをテーマに、セットアップを制作した。様々な手法を用い、糸を黒色に染めることに成功した。元の糸の違いから出る風合いを活かした作品に仕上げた。

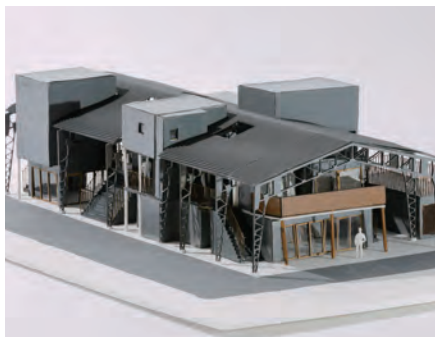


廣岡 冴香
Sayaka Hirooka

林田ゼミ

棚にもなる椅子とサイドテーブル

椅子は“座る”という一つの機能しか持っていない。そこにもう一つの機能を付け加えたら、今までにない面白い椅子ができるのではないだろうか。日常では棚として、非日常では椅子とサイドテーブルとして使える多用途な家具を、今ここに。

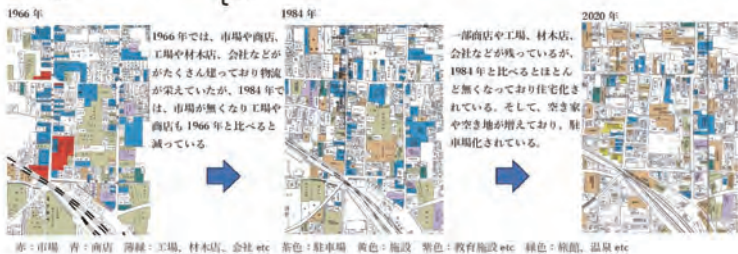
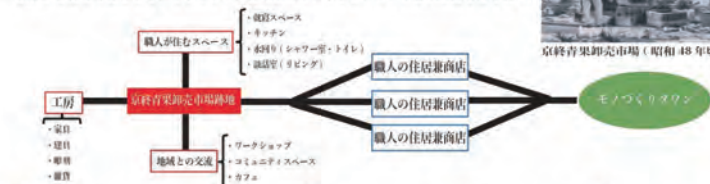


将来の京終モノづくりタウンへの変遷について

- ・ 現在、住宅が立ち並んでいる京終駅周辺は、かつては市場や商店、工場や材木店などが立ち並び、奈良市の物流の拠点ともいえる地域であり奈良の南の玄関口だった。
- ・ 将来X年後にモノづくりタウンにしたいために、一度に計画を行いモノづくりタウンに変えていくのではなく、今回計画した京終青果卸売市場跡地に職人たちを呼びアーティスト・イン・レジデンスやチャレンジショップを行ってもらい、空き家や空き地になっているところに住んでもらい商店や新たな拠点を徐々に開いてもらう。
- ・ 京終がどのようにしてモノづくりタウンに変化していくかをプログラム化したものである。



京終青果卸売市場（昭和48年頃）



福井 晨人
Ryuto Fukui

前川ゼミ

～京終モノづくりタウン～

物流の拠点として賑わっていた京終という町が、今では住宅地になり昔の面影がほとんど消えていっている。この歴史の原点に立ち戻り、物流や工場を取り合わせたものづくりタウンを提案する。そのために、職人たちの拠点地を計画した。



福嶋 涼介
Ryosuke Fukushima

村田ゼミ

綿とダリアから着物へ ～奈良で生まれたものをカタチに～

綿から手紡ぎで糸を作り、ダリアを染料として着物を制作。
ダリアは、球根を採取した後、花びらを捨ててしまう問題がある。
今回は、この様な問題を抱えたダリアの花びらを頂き、紡いだ糸を染色し、
着物制作を行う。



藤原 彩那
Ayana Fujiwara

陳ゼミ

自給自足によるAsuka縁食堂

食を通じて出会いを生む交流場所「縁食堂」。現在明日香村にある空き家を利用し、農業+食+宿のすべてが行える自給自足の共同スペース。実際に育て、加工や調理をすることで、食べ物の尊さを知ることができ、助け合いながらすることで交流も深まる。

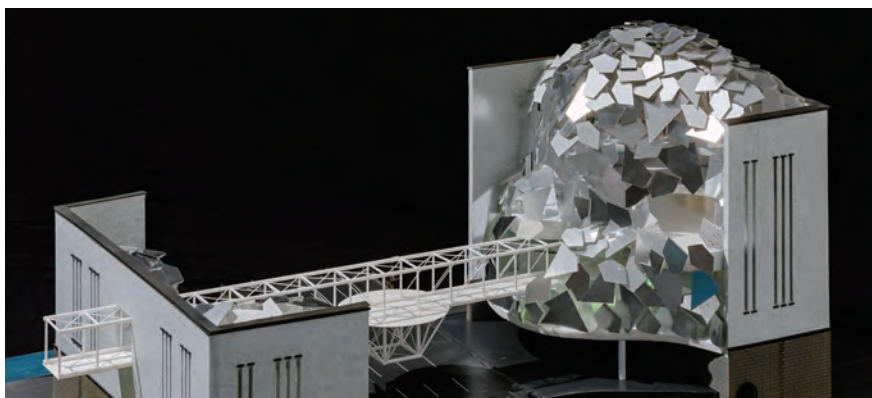


部原 夕海
Yumi Hebara

村田ゼミ

佐賀錦で海を表現する ～大切な日を彩る鞆の制作～

佐賀錦の特徴を活かし、海を表現したデザインで佐賀錦を織った。
佐賀錦は和装に合わせる小物として使われることが多い。
その為、和装はもちろん様々なシチュエーションで使用できる鞆の制作を目的とした。

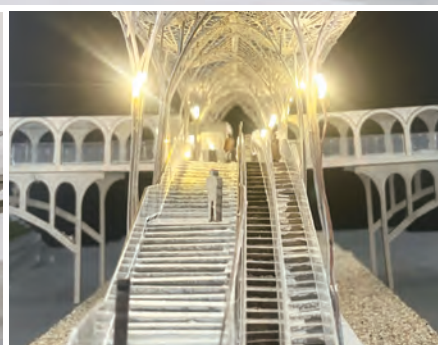
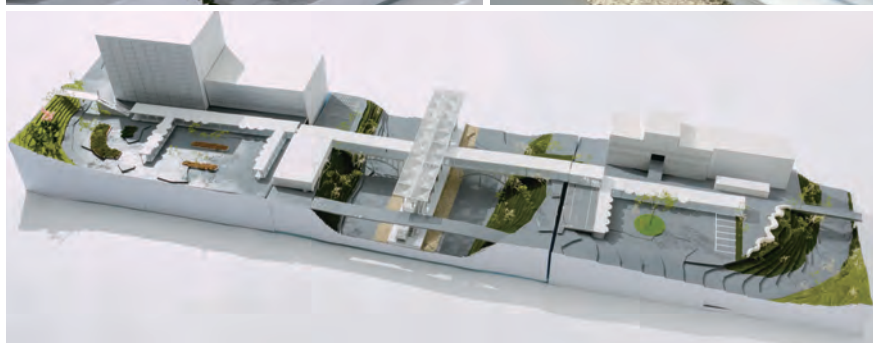


前野 風香
Fuka Maeno

藤井ゼミ

Naniwabashi Live – House Complex

大小様々な7個のライブハウスやステージでは、駆け出しのバンドマンも有名グループも公演する。中之島の歴史的名建築を引用した外皮から、溢れ出す金属の破片。それら1枚1枚は未来のスターだ。



木漏れ日のある駅

松上 萌
Moe Matsuue

三井田ゼミ

昨今の駅は移動のための通過点として、効率化を求められ似たような駅が増えていると感じる。そこで、その土地ならではの魅力を発進し町の顔となる、場所性を感じられる駅を提案したい。



松田 歩
Ayumu Matsuda

藤井ゼミ

保護犬の故郷 ～犬の保護・訓練・譲渡施設～

一人でも多くの人に保護犬の存在を知ってもらい、一匹でも多くの保護犬たちの新しい家族との出会いをサポートする、保護犬たちの故郷となる保護施設。
この建築から人と犬、人と動物が共生する社会となることを願って。



入浴・入浴着に関する意識調査 —結果—

Q1.お風呂に入ることは好きですか。 N=147



Q2.入浴施設、スーパー銭湯、温泉は好きですか。 N=147



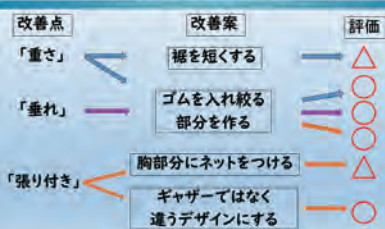
Q4.友人等と一緒に風呂に入ることは平気ですか。 N=147



Q5.入浴の際に知らない人や知人に自分の裸を見られることは平気ですか。 N=147



バスタイムワンピースの改善



松本 紗弥
Saya Matsumoto



脇田 うた
Uta Wakita

村田ゼミ

誰もが使える入浴着を目指した改良
～身近な若年層をきっかけに～

若年層を対象とした入浴に関する調査で、乳がん経験者以外にも入浴着の需要があることが判明した。また、ワンピース型入浴着の性能課題が浮き彫りになった。これらの課題に対応し、入浴の安心感とQOL向上を目指して、「ユニバーサル入浴着」の改善を進めた。



水谷 立命
Ritsumei Mizutani

村田ゼミ

ユニセックスで着用できるジャケットの提案 ～この藍を墨々に～

多種多様なユーザーニーズに応えるためにJISサイズにユニセックスが追加されている。しかし、明確な基準がないので今回の研究ではサイズを具体的な数字で明記するとともにセットアップを制作した。また藍と墨を組み合わせた色味の研究も行った。

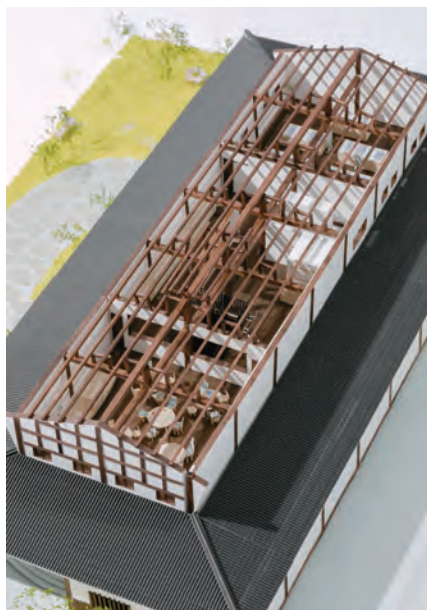
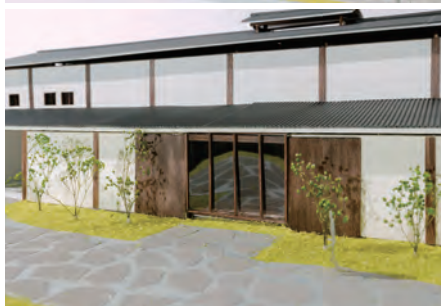


森本 陽大
Hinata Morimoto

三井田ゼミ

集いの場

石切参道商店街の東側通りは、ただの通り道になっている。訪れる人や地域住民の人がくつろげる場所を計画するべく休憩所とコミュニティキッチンを提案する。

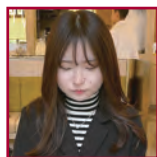
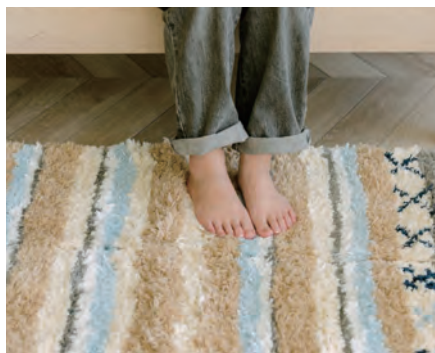


山岸 美月
Mizuki Yamagishi

林田ゼミ

コミュニティツーリズム in 旧今立町 ～みてきいてふれる～

越前たけふ駅の開通に向け、コミュニティツーリズムの仕組みを活かして地域活性化に繋げていけるような観光施設を計画。福井県の伝統的民家の特徴をモチーフに設計した。



山口 桃穂
Momoho Yamaguchi

村田ゼミ

足下にも彩りを一残糸を用いたラグ制作ー

靴下工場で廃棄される残糸をファブリック素材としても活用したいと考え、ラグを制作した。肌に優しい靴下の糸をラグに使うことで、素足に心地良い肌触りや踏み心地を楽しめる。用途に合わせて好きなサイズに変更できる。



山田 夏実
Natsumi Yamada

陳ゼミ

Musik Kashi Park —音楽×まち×人を繋ぐ交流の場—

MUSIK(音楽)を使って生まれ育った香芝市を活性化していきたい！
周囲の市町村に負けない市民が誇りに思うようなスポットを創出、
日常生活の中で身近な存在になる公園を計画。

作業風景





• Theses •



旧奈良鉄道樅本駅舎の建築的特徴および変遷過程について

追田 奈菜

Nana Oita

前川ゼミ

〈目的〉

少子化や過疎化、物資の集約化により、人口減少が進む地域では駅舎の保存が厳しい状況にある。本研究では、奈良県のJR桜井線沿線にある樅本駅の現状を調べ、形成過程および建築的特徴を明らかにすることを目的としている。

〈意義〉

本研究では、明治31年に開業が始まったJR桜井線沿線にある樅本駅の駅舎を研究対象とする。JR桜井線には木造駅舎が未だ多く現存するが、改札機能に特化した駅や明治期の駅舎の復元工事を行った駅など現状は様々である。老朽化の進んだ駅舎を保持し、それを利用し続けるには、改札機能の利便性だけでなく、建築としての価値を認識する必要がある。樅本駅の現地調査と一次資料から、開業当時の駅舎の姿を復元し、本駅舎の歴史的価値を精査していく。これまで、JR桜井線に対する研究において、樅本駅における建築的価値と現在の駅舎に至る変遷を検証する視点はなく、ここに本研究の独自性があると考える。

〈方法〉

実測調査と明治期に刊行された駅舎の標準設計図を用いて、樅本駅の建築的特徴を明確にし、当初の復元と現在の駅舎にいたるまでの過程を明らかにする。

〈結論〉

樅本駅舎は、開業当初と現在とでは姿が異なることが一次資料との比較から明らかとなった。開業当初は木造平屋建て、切妻造平入りの間口12m、奥行6mの建物であることがわかった。小屋梁や内装など既存の部分に改変が確認できたが、駅舎の待合室にあたる正面の表構えは、窓以外は改修の痕

跡がなく、開業当初の姿を保持している可能性がある。駅舎内部の平面構成は、当初の間取りと大きく異なり、待合室の位置が変化したと推察できる。また、宿直室の増築部分における小屋梁の継ぎ目の痕跡から、大正から昭和にかけて行われた改修時に開業当初の梁から取り換えられたことがわかる。さらに、現在の樅本駅舎は正面入り口に設けられたポーチの欄間装飾、石段の耳石、木鼻、四半敷状の目地切りから寺院風の装飾が取り入れられた駅舎である。奈良に現存する明治期建築の駅舎は少なく、樅本駅は明治期の建設当時の姿とその後の増築部分が入り混じる希少性の高い駅舎であることが分かった。

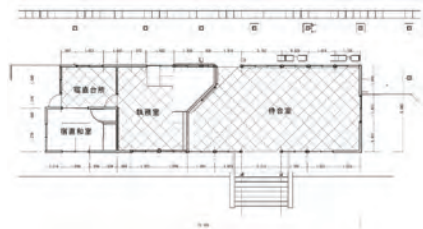


図1 樅本駅舎現状図

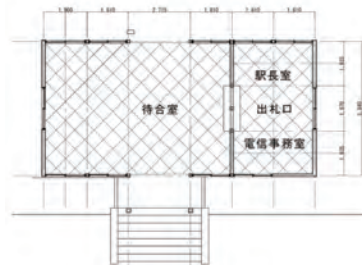


図2 樅本駅舎復元図



入浴着に使用されている生地素材評価に関する研究 —入浴着の素材と残留石鹼との関係を中心として—

向井 勇大
Hayata Mukai

村田ゼミ

〈目的〉

乳がんの罹患者数は増加傾向にある。2010年頃から乳がん手術後の患者に対し、特定の施設で着用が許可される入浴着が市販されている。しかし、これらの入浴着に使用される生地の評価に関する研究は未だ行われていない。本研究の目的は、入浴着の素材特性を物性計測及び主観評価により明らかにすることである。加えて、体を洗った後に入浴着に石鹼が残留するかどうかの実験を行い、その結果を素材特性と関連付けて考察する。石鹼の残留に関する検証は、衛生面での懸念を軽減することに寄与すると考えられる。これらの入浴着の素材特性を明らかにすることにより、より快適で実用的な製品の開発へと繋がり、乳がん手術後の女性の生活の質(QOL)の向上に貢献することが期待される。

〈方法〉

本実験では、市販されている入浴着5種類とアンダーシャツ用、カットシャツ用の2種類を含む合計8種類の生地を使用し、1から8までの番号を割り当てた。

表1 実験に使用した試料の名称・用途・素材

試料番号	試料名称	サンプル画像	用途	素材
①	海あんB		入浴着	ポリエステル ポリウレタン
②	濃あんP		入浴着	ポリエステル ポリウレタン
③	バスクロス		入浴着	ポリエステル ポリウレタン
④	バスタイムカバー		入浴着	ポリエステル ポリウレタン
⑤	バスタイムトップス		入浴着	不織布
⑥	アーバンネット		アンダーシャツ	ポリエステル ポリウレタン
⑦	コットンギャバジン		カットシャツ	綿
⑧	ニット		Tシャツ	綿

実験は以下の手順で実施した。

- ① KES計測器を使用しての物性測定。
- ② シェフェの一对比較法(中屋の変法)による官能評価。

残留石鹼実験: 弱アルカリ性および弱酸性洗剤を使用し、残留石鹼を測定した。主な計測項目はpH、EC、TDSとした。100cm²の試料に6ccの洗剤を塗布し、もみ込んだ後、3種類のサンプル(何もつけないもの、洗剤を付けたもの、洗剤を付けて洗い流したもの)をそれぞれ100cc

の水で振り洗いし、洗浄後の液体と使用した水のpHを計測し、その計測データを以下の式にあてはめPH変化率を求める。

$$\text{pH変化率} = \frac{\text{濯ぎあり pH} - \text{濯ぎなし pH}}{\text{使用水 pH} - \text{濯ぎなし pH}}$$

〈まとめ〉

KES測定器による物性測定とシェフェの一对比較法による官能評価の結果、物性測定で示された「柔らかさ」「伸縮性」などの特性が官能評価でも同様に評価された。これにより、KES測定器による物性評価と官能評価の間に大きな差はないことが示された。

残留石鹼の計測では、それぞれのサンプルと残留石鹼との関係を分析した。入浴着に使用されている生地素材に比べ、シャツ等に使用されている生地素材はpH変化率が大きく、シャツ素材は洗剤が落ちにくいと考えられた。

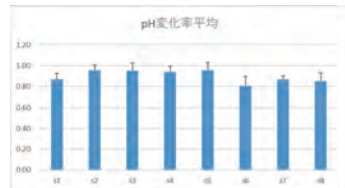


図1 弱酸性石鹼pH変化率

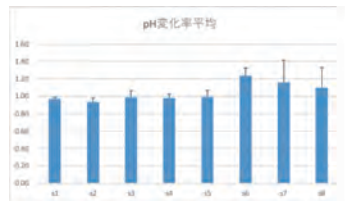


図2 弱アルカリ性石鹼pH変化率

入浴着についてはそれぞれのサンプル間での変化率の差は小さく、泡切れの良さも共通して良好であった。S2、S4、S3、S5、S1の順に洗剤の変化率は小さく、吸水性や撥水性の結果と照らし合わせると、S4の素材が最も水質に与える影響が小さいと考えられる。

謝辞: 本研究にご協力いただきました皆様に御礼申し上げます。



近くて遠い隣まちからちょっと知っている隣町へ
～3年目のケーススタディ～

上西 剛己
Gouki Uenishi

清水ゼミ

〈目的〉

自分のまちはもちろんのこと、隣まちについても学び、お互いのまちに興味を持つことは、災害時の共助や、地域経済の活性化の観点から重要である。しかし、学校教育において自分のまちについて学ぶ機会はあるが、隣まちのことを学ぶ機会は多くはない。そこで、地域住民が地域を知りながら、交流する機会とすることを意識したイベントを3年間運営し、持続可能な住民主体のイベントへの移行の可能性や断続性、課題について実証的に検証することを目的とする。

〈方法〉

河合町と広陵町の小学生を対象に、3年間にわたって、両町に纏わるクイズを出題する竹馬★クイズラリーを実施した。

地域住民を交えた運営組織をつくり、企画から運営までを行なった。イベント終了後に、参加者・運営者に対してアンケート調査を実施した。さらに、アーン・スタインの「住民参加のはしご」を基に、「イベント住民参加のはしご」を作成し、分析を行った。

〈まとめ〉

●参加回数とまちへの関心度

今年のイベント参加小学生の参加回数と自分のまち、隣のまちへの興味関心を比較したところ、イベントへの参加回数が多いほど、両方のまちに興味を持っている割合が多くなっていることが分かった。

●イベント住民参加のはしご

昨年度までは、2年間をかけて、運営を行っていた先輩たちが地域住民との人間関係を構築し、その結果、参加のはしごを3段階目から5段階目まで上げることに成功した。一方、本年度は、昨年度までのリーダー的存在だった地域住民らが様々な事情により参加できなくなったことから、住民の積極的な参加が減少した。また、先輩たちの卒業と入れ替わりで私が運営に携わることになったこと

も、地域住民との組織づくりに時間を要し、役割分担ができなかった一因と考える。一方、今年度から対面会議を実施した結果、地域住民の表情など知ることが出来たため、運営組織を構築することができ、その後のオンライン会議でも円滑に話を進めることができた。本研究を通じ、イベント参加のはしごをのぼるのに最も必要なことは、組織内の信頼性ではないかと推測する。運営方法などの手法のみならず、組織内の信頼性が確保されてこそ、安定した運営が可能である。

謝辞：本活動にご協力、ご参加してくださった地域住民の方々に厚く感謝申し上げます。私の成長を心より喜んでくださった皆様に本当に感謝しています。ありがとうございました。

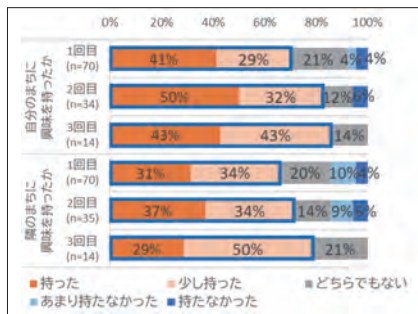


図1 参加小学生の参加回数とまちへの興味

表1 イベント住民参加のはしご(筆者作成)

段階	住民の権利としての参加	住民が主体で行い、大学がサポートする。
5	(住民の力が生かされる住民参加)	大学と地域住民が同じ程度の決定権を持ち、運営準備を行う。
4	(住民の形式的参加(印としての住民参加))	運営段階の参加者が基本的には大学が決定したものに對して、意見を、議論する。
3	住民の形式的参加(印としての住民参加)	当日のみの参加者に基本的にはマニュアル通りに聞いてもらうが、部分的な改善点は受け入れる。
2	実質的な民意無視(住民参加とは言えない)	大学が決めたマニュアル通りに当日のみ参加してもらい、
1	実質的な民意無視(住民参加とは言えない)	大学が企画したイベントに参加者として参加してもらい、イベントの本来的目的を理解せず参加する。



大規模建造物跡地の転用手法と周辺環境との関係 — 野球場跡地を対象に —

奥山 龍介
Ryusuke Okuyama

前川ゼミ

〈目的と意義〉

大規模建築が老朽化や経営難で使用されなくなり、その跡地利用の問題が課題とされている。大規模建築が新たな大規模建築に生まれ変わったり、更地のまま放置されたり、細分化され利用されるなどさまざまである。一度役目を終えた場所が新たな形に姿を変え、その町にどのような影響を与えているのだろうか。本研究では大規模建築である野球場に着目し、その経過をみてみたい。具体的には、球場跡地利用の手法と立地特性の関係を明らかにするとともに、転用後の周辺環境、完成年代、所有者を含めた整備の経緯や特殊な転用方法がされた要因について明らかにする。

〈方法〉

1936年日本職業野球連盟（現日本プロ野球）の創設以降、プロ野球の公式戦が1試合でも開催され、その後2022年までに閉鎖した野球場を分析の対象とする。

- ① それぞれの対象球場を球場名から閉鎖後の転用地名、建設年、閉鎖年など明らかになっている情報を整理し、各項目の結果と分析をおこなう。
- ② 上記情報でまとめた結果から、転用分類と各項目をクロスに分析し、転用地に与える影響について明らかにする。
- ③ ①、②での分析で明らかになった特徴についてまとめる。
- ④ ③でまとめたものを元に特殊な方法で転用されている事例について詳細にその経過を検討する。

〈結論〉

本研究で分析の対象とした、閉鎖したプロ野球場110件の転用分類について見ると、対象となる球場の転用施設はさまざまみられたが、当初の野球場という機能に関連するものが半数以上を占める結果となり、当初の機能が転用機能に大きく影響を与えていることが分かった。その一方で住宅地や商業施

設の様な球場に関連のない屋内施設に転用する事例で残りの半数を占める結果となった。（図1）

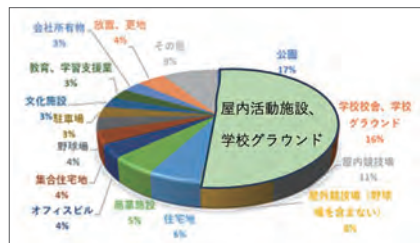


図1 対象球場の転用事例

転用時の周辺環境との関係では、商業施設利用や住宅地利用では駅からの距離や建てられる場所によってそれぞれの特徴がみられたが、その他の転用分類に大きな特徴はみられなかった。しかし、完成年代、所有者に関しては転用分類ごとに特徴がみられ、転用時に大きな影響を与えているという結果も確認できた。

また、球場当時の構築物や外形などがそのまま転用後も残る事例（図2）や球場の面影は一切なく球場の中で様々な施設に細分化した転用方法がみられ、その要因についても解明された。

球場の外形のまま転用時に継承した事例 No.12 鳴海球場→名鉄自動車学校



図2 鳴海球場閉鎖後1960年航空写真
（出典：<https://npb.jp/stadium/column.html>）



イームズ邸におけるインテリア元素の特質

梶原 百華
Momoka Kajihara

前川ゼミ

〈目的と意義〉

インテリア元素の内部空間における特質を明らかにすることを目的とする。その手立てとしてチャールズ&レイ・イームズによって設計されたイームズ邸を対象とする。なぜなら、形鋼やスチールサッシ等の工業製品を用いて建築されたイームズ邸は、その内部もモダニズム的文脈により矩計を基本とした無機質な空間であるにも関わらず、その内部空間が現す雰囲気は極めて豊潤であるためだ。イームズ邸のインテリア元素や内部空間のつくりについて研究し、内部空間におけるインテリア元素の特質を明らかにすることで、これからのインテリア、建築デザインに繋がるヒントになると考えた。

〈方法〉

イームズ邸についての各種文献、また、Eames Foundationに所蔵されている画像、図面を分析の対象にする。これらの資料を用い、イームズ邸に配置されているインテリア元素をすべて把握し、平面図、展開図へのプロット図を作成。さらに、インテリア元素を家具、敷物、植物、雑貨に分け、装備一覧表にしてまとめ分析を行う。

〈集計結果〉

表1 種別の集計結果と内訳

種別	数量	内訳
家具	25	椅子: 8 棚: 3 テーブル: 8 ブランダー: 1 照明: 5
敷物	7	ラグ: 1 カーペット: 6
植物	7	アセビ: 1 ツディ: 3 モンスセラ: 2 パネラ: 2
雑貨	657	置物: 9 リネン: 39 本: 467 民芸品: 116 その他: 657
総数	696	

〈結論〉

本研究により、イームズ邸の内部空間におけるインテリア元素の特質が明らかになり、インテリア元素の種類や配置による内部空間の印象の違いが分かった。

本研究で分析の対象としたイームズ邸は、鉄骨とガラスでできたモダニズム建築であり、そのままの状態では飾り気のない冷たい

空間に感じる。しかしインテリア元素の配置やスタイルの工夫によって、何も無い空間に彩りや温かさが生まれ、豊かな空間になる。インテリア元素の数が多く、一見混沌と感じる空間も、それらの共通性や、アイレベル、空間の分節、外部との繋がりを考慮した配置とすることで、各インテリア元素の機能や役割が明らかになり、その中に秩序が生まれることが分かった。

インテリア元素は内部空間を彩る大きな役割を果たし、元素が合わさることで各元素自体が持つ機能の相乗効果も生まれる。インテリア元素が内部空間に与える印象は多大である。



図1 イームズ邸リビング・アルコーブ 平面図



図2 イームズ邸アルコーブ 北面展開図



図3 イームズ邸リビング・アルコーブ 西面展開図



夏季における就寝時も暑熱対策の時代変化

河口 歩夢
Ayumu Kawaguchi

東ゼミ

〈目的〉

近年、地球温暖化の影響により猛暑日が増加し、夏の熱中症対策が不可欠となった。熱帯夜日数についても、長期変化傾向をみると全国的に増加していると報告されている。そこで本研究では、睡眠時の暑熱対策に着目し、冷房機器の使用法や使用期間がどのように変化したかを調査することとした。

〈方法〉

ウェブアンケートとし、Google Formsを使用した。

- ・ 調査期間：2023年10月～11月
- ・ 調査対象者
関西在住の大学生とし、協力が得られる場合には、その親にも回答を依頼した。親子の紐づけについては親子間でパスワードを設定のうえ回答してもらった。就寝時の暑熱対策に関しては、現在、中学1～2年の頃、高校1～2年の頃の3つの時代を設定して、過去の経験を思い出して回答してもらった。大学生の回答者は男性10名、女性49名の計59名、親子10組であった。

- ・ 主な調査項目
(基本属性)性別、年齢、体質等
(住宅概要)住宅形態、築年数、寝室の概要等
(就寝時の暑熱対策)
エアコン/扇風機の使用開始と終了時期、設定温度、使用するタイミング、タイマー使用状況、冷房機器使用時に気になること、冷房機器の必要性等

〈まとめ〉

時代が経過するにつれて大学生のエアコンや扇風機の使用法に変化がみられた。エアコンについては、中学生の頃は3時間以内に消えるようタイマーをセットしている割合が約7割あったが、現在では約半数に減少した。一方、つけっぱなしの割合は10%から25%に増加した。また、扇風機を併用する割合も増加し、機器の使用期間は長くなる傾向がみられ、時代とともに就寝時のエアコン使用は欠かせないという回答が増えていた(図1)。エアコンの設定温度については、中学生の頃は28℃が最多であったが、現在では26～28℃に分散しており、全体的にやや低温になった(図2)。

親子間の比較は回答数が少なかったため、事例的に考察した。親は大学生と比べて時代変化に伴う設定温度の低下は顕著にみられなかったが、機器の使用期間やタイマーの設定時間は同様に延長する傾向がみられた。

謝辞：アンケートにご協力いただいた学生と保護者のみなさまに感謝申し上げます。

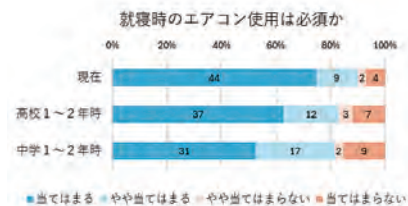


図1 就寝時のエアコン使用の意識

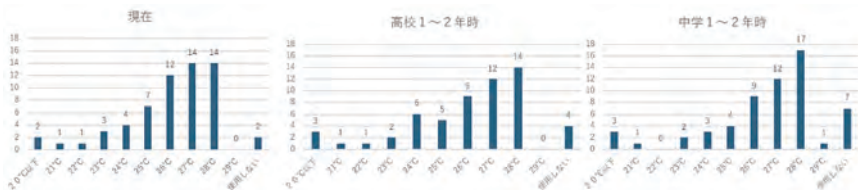
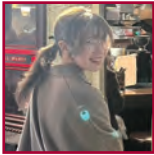


図2 就寝時のエアコン設定温度



明治時代後期における商業施設の外観デザインに関する研究

河田 彩乃
Ayano Kawata

前川ゼミ

〈目的〉

商業施設の外観デザインはその時代の流行に合わせ、大衆に向けてデザインされており、商店建築はその時代の雰囲気を感じることができる。その一方で時代の流行に左右されることから移り変わりやすく、住宅や事務所などと比較すると改築されることが多いため、現在に明治後期のまま残っている商店建築はほとんどない。そこで日本の商業施設が多く造られ始めた明治後期の商店建築の外観に見られる特徴や使用目的によるデザインの共通点があるのかを研究し、当時の商店建築のデザインの流行や時代による変化を明らかにする。

〈方法〉

日本で商業施設が多く造られ始めた明治後期の商店建築の外観については、著者鶴飼長三郎が明治40年に出版した『各種商店建築図案集』という図案集を分析対象とする。ここには53件の外観が収録されている。また、昭和前期の商店建築については、昭和4年に出版された著者前田重勝の『最新商店建築正面設計図』を対象とする。ここには48件の外観が収録されている。これらの事例を基本情報（商業施設の利用目的・階数・屋根の材質・構造）様式（古典主義・ロマネスク・ゴシック・バロック・チューダ・アールヌーボー・ゼセッション・アールデコ・表現主義・町家風・モダニズム・デスティール・ライト風）各部形状（外壁・ドームの有無・塔の有無・柱・看板の枚数・看板の表記方法・出入口の形状・窓の形状・ペディメントの形状）に分類し、分析を行う。

〈まとめ〉

分析結果により、明治後期の商店建築の外観デザインの流行および明治後期から昭和前期へのその変化について明らかになった。

明治後期では古典主義が42%と非常に多いことに対し、昭和前期では新様式が多く、合わせると72%と、非常に多い結果になった。明治後期では古典主義が主流であることがいえるが、昭和前期では新様式が多い結果になった。（図1）

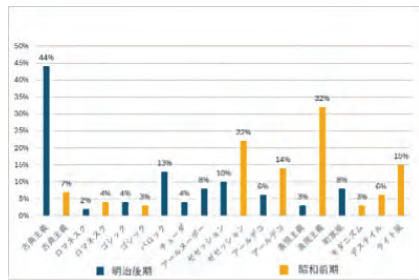


図1 明治後期と昭和前期の分類「様式」の集計結果

明治後期では古い建築様式で華やかな商店建築が多いという特徴がみられたが、昭和初期では古典主義は激減し、ゴシック・ロマネスクも含めて様式主義はみられなくなり、表現主義・ゼセッション・アールデコ・ライト風・デスティールといった新しい建築様式に移行し、こうしたデザインがこの時期広く商業施設に取り入れられていたことが分かった。

『各種商店建築図案集』と『最新商店建築正面設計図』は出版年数がわずか22年しか変わらないが、商店建築の外観デザインは大きく移り変わったといえる。一方で商業施設としての性格上その外観には常に装飾が求められていたこともわかった。



執務者のウェルネス向上にむけた事例調査 ～新社屋をより良いものにするために～

小林 隆斗 屋敷 奈保

東ゼミ

Ryuto Kobayashi Naho Yashiki

〈目的〉

近年、執務者のウェルネスに着目した調査が行われるようになったが、全体の大半を占める中小企業における職場環境の実態調査はほとんど行われていないのが現状である。そこで、私たちは新社屋を計画中の企業に協力を得て、基礎データの取得を目的とした実態調査を行うこととした。調査結果の一部は新社屋を計画する設計事務所と共有し、改善策を提案する予定である。新社屋移転後に、執務者の心身状況や意識変化を再調査することで、環境改善による効果を検証し、中小企業のウェルネス向上に貢献することを目的とする。

〈方法〉

調査対象：大阪市内の製造業K社（本社・検査工場，建物の設備は調査対象外）

〔環境測定項目〕

温度・相対湿度・照度・二酸化炭素濃度（15分間隔で自動計測）

環境測定時期：2023年8月～12月

〔アンケート項目〕

以下の3種類のアンケートを実施した。

- ①職場環境とウェルネスに関するアンケート（光・温熱・空気・音・空間・IT環境の満足度、作業のしやすさ、疲労感・人間関係について等）
- ②労働者の疲労蓄積度自己判断チェックリスト
- ③POMS2 日本語版（成人用 短縮版）

①は職場の環境に対する評価と要望、満足度やモチベーションに関する調査で、比較的小規模な企業に適用可能なアンケートとしてSAPアンケートを参考に作成した。②は疲労度の指標として、③は心理状況を把握するためにそれぞれ既存の調査用紙を使用した。

アンケート調査時期：2023年9月

〈まとめ〉

環境測定結果より、温熱環境は外気の影響を受けやすい一部の箇所を除いて概ね良好、湿度は冬季にのみ低湿度が問題であった。その他主要な課題として3点を挙げ、改善策をまとめる。

1点目は光環境で、アンケートでは不満は少なかったが、環境測定の結果、全般照明の平均が1200～1400lxと高照度の箇所があった。改善策として、室内全体のタスク照明の照度を抑え、精密作業時にはアンビエント照明を使用することや、調光・調色機能を付加して作業時と休息時の環境調節を提案する。また、照度は十分であるものの自然光を感じられないための閉鎖感を軽減するために、採光計画の工夫が望まれる。

2点目は空気環境で、二酸化炭素濃度がエアコン使用頻度の低い10月を除いて、執務者の多い部屋では1000ppmを超えることが多かった。アンケートでは、においに関して気になる人が多く、「食品のにおい」がその原因として回答され、自席で昼食をとる人が多い影響と考えた。改善策として、適切な換気量の確保とともに、利用しやすい昼食・休憩スペースの計画が挙げられる。

3点目は空間環境で、他人が気になるなど満足度は低く、広さやレイアウト、リフレッシュ空間の不足が課題であった。改善案として、事務的な作業空間には他者と視線が合いにくいソシオファーガルな家具レイアウトを、製造部門には負担の少ない姿勢で作業できるような高さ調節と移動が可能なデスクの設置を提案する。さらに、新社屋にリフレッシュ空間を設けることは心理的な疲労感を減少させ、作業効率の向上につながると考えられる。

以上の提案が職場の満足度や総合的なウェルネス向上に寄与し、今後の調査でその効果が検証されることを期待する。

謝辞：調査にご協力いただいたK社の皆様に深く感謝いたします。



竹家具からみる近代日本家具の過渡的状況

堤 清玲

Sumire Tsutsumi

前川ゼミ

〈目的〉

近代日本において制作された竹家具に見られる特徴や共通点を明らかにする。具体的には、家具メーカーからの竹家具が販売され、更に代用品研究が盛んであった昭和初期において制作、検討された家具に見られる特徴や共通点を明らかにする。

〈意義〉

竹を用いた家具は日本伝統の家具、台湾、西洋様式、モダニズム等の側面が見られるので、竹家具を研究することで日本の家具における日本伝統家具及び西洋様式家具から戦後本格化するモダニズム家具への過渡的状況の一端が明らかになるのではないか。このように竹という素材に着目し、日本の家具の過渡的状況を明確にすることに本研究の独自性があると考ええる。

〈方法〉

本研究では昭和戦前期の帝都東京で七大大百貨店が競って開催した新作家具展示会の貴重な記録である『近代家具装飾資料』（洪洋社）全47集に掲載されている竹を用いた家具112件を主として分析の対象とし、この112件を独自に分類、分析していく。

〈結論〉

本研究により、近代日本において制作された竹家具にみられる特徴や共通点を明らかにすることができた。端的にまとめれば、近代日本において制作された竹家具は、その材料の特性が考究されることにより、日本伝統からモダニズムへとその受け皿を変えていったといえる。

本研究で分析の対象とした『近代家具装飾資料』、『工芸ニュース』では、「日本伝統」、「モダニズム」の2つの意匠が大半を占めていた。「台湾」、「西洋様式」があまり制作されなかったのは、デザインが細かく量産が難しい家具が多いため、戦時体制化にお

ける機能主義が研究されたこの時代に合わなかったと考える。年代を重ねて見てみると、戦前期の家具はそれまでの伝統的技術の継承、応用による「日本伝統」が大半を占め、1939年まではその件数は最も多い。全ての意匠が1938年にピークを迎え、「日本伝統」、「台湾」、「西洋様式」はその数を大きく減少させているのに対し、「モダニズム」はそれ以降もコンスタントに制作され、1940年にはその件数が最も多くなった。1934年に岡安順吉によって竹の特性である弾力性、割裂性が発見され、1931年に工芸指導所によって竹合板が開発されるが、それらの特性の応用の対象として選ばれたのがモダニズム家具であることがいえよう。また、「日本伝統」に弾力性、割裂性が適合しなかったのは「日本伝統」は竹の特性である「抗挫力」に基づいた竹筒利用によりその意匠が完成していたからだと考えられる。

このように近代日本において制作された竹家具は「日本伝統」である伝統的技術の継承・応用から、新たに見出された竹の特性を活かした「モダニズム」へと近代日本において受け入れられていった。その背景は、戦時下における生活品の簡素化や、工芸指導所による竹の特性の発見、竹籐・竹合板の研究があった。その受け皿として選ばれたのが、機能主義を規範に据えるモダニズム家具であったといえよう。



図1 NO.85

(出典：『近代家具装飾資料』第18集、洪洋社(1950))



オープンキャンパスのバナーにおける 蛍光色に対する印象評価

久井 小瑛

藤原 未唯

李ゼミ

Chiei Hisai

Miyui Fujiwara

〈研究目的〉

大学ホームページからは、学部紹介やオープンキャンパスの実施など、大学に関する情報を伝達される。なかでも大学ホームページのデザインの一つとしてバナー形式が用いられている。バナーは制限された面積に誘目性の高いデザイン、色を用いることから視覚的情報によって閲覧者にアピールできる特徴がある。一般に視認性が高い色として蛍光色が使用される場面が多いものの、まぶしさや下品さのような否定的な評価も想定できる。

本研究では、インターネット利用率の高い大学生を対象とし、オープンキャンパスのバナーに注目し、スマートフォンにおける視覚情報から、どのように評価されるのかについて蛍光色を中心に検討を行った。

〈方法〉

①予備調査にて国公立・私立大学のホームページから蛍光色、普通色、金銀、白黒の合計14色を抽出し(図1)、「OPEN CAMPUS 2023」を用いて図2のように画像試料を作成した。

②オープンキャンパスに関する印象調査を行い、さらにGoogle Formsにて画像試料(図2)をスマートフォンによりランダムに提示し大学生40名(男性20名、女性20名)に評価してもらった。

〈まとめ〉

アンケート調査の結果を因子分析やイメージプロフィールにより分析した。印象調査よりオープンキャンパスに訪れる目的は「雰囲気を知るため」という回答が最も多かったが、SD法(16の形容詞対語(表1)で1~5の5段階評価)と0~10までの総合評価を用いた被験者実験より、「上品さ」を前提として「親しみやすさ」もより感じられるバナーが高評価であった。そのためオープンキャンパスにおいて学生は、学校の持つ「上品な」「真面目な」「知的な」印象と同時に、「親しみやすい」「楽しい」といった雰囲気を探求しているのでないかと考えられる。さらに、印象調査において「行きたい」という評価と被験者実験での総合評価の順位はほぼ同じであった。したがって、バナーの色みから受ける印象評価は、オープンキャンパスの参加意向に影響を与える要因のひとつとして考えられる。

表1 SD法に用いた形容詞一覧

行きたいと思わない行きたい	つまらない面白い
上品な 上品でない	信頼感 信頼感ない
自然な 人工的	平穏な 不安定な
楽しみのない 楽しみの多い	緊張感がある 緊張感がない
暖かい 冷たい	真面目な 真面目でない
静かでない 静かな	静かでない 静かな
賑やかな 賑やかでない	賑やかな 賑やかでない
賑やかな 賑やかでない	賑やかな 賑やかでない

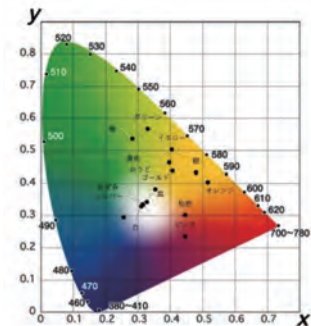


図1 xy色表系における試料分布



図2 作成した画像試料



若年男性の生理反応と冷え性判断基準の関係

福田 莉奈

南 成明

東ゼミ

Rina Fukuda

Naruaki Minami

〈目的〉

従来の冷えを扱った研究は、女性を対象としたものが多かった。しかし、近年では生活習慣の乱れ等に起因する若年男性による冷え性の訴えが増加している。そこで本研究では、報告例が少ない若年男性に着目し、冷え性の自覚と判断基準による冷え性診断との整合性を確認するとともに、実際の生理・心理反応との関係を、人工気候室実験における皮膚温変化の傾向と温冷感等の主観申告の関係から検討することを目的とする。

〈方法〉

・ウェブアンケート

(主な調査項目)

冷え性の自覚、「冷え性」の調査問診票と診断基準(寺澤, 坂口ら), 冷える身体部位, エアコン設定温度, 生活習慣, 食習慣, 身長・体重, 体質等

回答者: 男性 38 名, 女性 71 名, 計 109 名

・人工気候室実験

(主な測定項目)

温度・湿度・皮膚温(平均皮膚温算出 7 点 + 7 点(冷えやすい部位) + 各自の冷える部位 1 点の計 15 点)・舌下温・血圧・心拍・温冷感・快適感・室温評価等

被験者: 健康な男子大学生 10 名

(実験条件)

28°Cの前室に 30 分、25°Cの実験室にて 60 分、その後 20°Cに室温を下げ 30 分椅座安静状態とし、相対湿度 50%、着衣量は 0.3clo

とした(表 1)

(調査・実験時期)

2023 年 9 月

表 1 実験のタイムスケジュール

	-30	-20	-10	0	10	20	30	40	50	60	70	80	90 (分経過)
申告記入		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
舌下温		1								2		3	
血圧心拍		1				2		3		4			
サーモ撮影			1				2	3					
室温	前室 28°C			実験室 25°C						実験室 20°C			
湿度	入室			50%						室温実室			

〈まとめ〉

アンケート結果では、冷え性を自覚する男性は約 4 割であった。冷え性の自覚と問診票による診断結果を比較したところ、男女ともに寺澤の冷え性診断基準との一致率が高かった。冷えを感じる身体部位は女性の方が多く申告し、部位も異なるなど性差がみられた。また、BMI が低いほど寒がりや冷え性と自覚する割合が増加し、冷え性と自覚する人は夏の自室のエアコン設定温度が高い傾向がみられた。

人工気候室実験における生理的な特徴として、身体部位別の皮膚温差が 3 ~ 4°C の特性 I (非冷え性)、4 ~ 6°C の特性 II (疑冷え性)、6°C 以上の特性 III (冷え性) の 3 群に分類した。冷え性者は実験開始時より足の指先や脛脛などの下肢の皮膚温が低く、20°C 条件における末梢部の皮膚温低下が著しく大きい傾向がみられた。

被験者の冷え性の自覚と診断の結果は概ね一致していたが、生理的な冷え性(特性 III)との一致率は 5 割未満と低かった。そこで、生理的冷え性(特性 III)の被験者の問診票の診断回答をもとに、寺澤の質問項目の一部に身体的特性を加えた若年男性向けの診断基準を検討した(図 1)。今回提案する診断基準は、若年男性の生理的な冷え性の予測に有効と考える。

謝辞: 実験にご協力頂いた被験者の皆様、実験室を使用させて頂いた武庫川女子大学 佐々尚美先生に感謝申し上げます。

判定項目 (6 項目 + 体質質問)

- ・6 項目
- 冬になると冷えるので履き厚着や履き数多、あるいはカイロなどをいつも履いているようにしている。
- 冬に手足は身体を暖めてくれる役割がある。
- 冬とか寒い日などは小便が冷たくてなる。
- 夏でも手が冷えることがある。
- しもやけができてやすい。
- 身体が急にあつくなったり、冷たくなったりすることがある。
- ・体質質問
- 冷え体質 (BMI 前 18.5 未満) である。

判定基準 (どちらかに当てはまっていると冷え性である。)

- ・4 つ以上当てはまる。
- 冷え体質 (BMI 前 18.5 未満) かつ 2 つ以上当てはまる。

図 1 提案する若年男性向けの診断基準



空き家の活動団体と地域コミュニティの関わりについて
—空き家対策モデル事業に採択された近畿圏内の12団体を事例として—

正岡 凜保
Rinho Masaoka

清水ゼミ

【目的】

現在、日本では空き家の増加が社会問題となっている。所有者のみならず、あらゆる活動団体が関わりながら、空き家の解消に向けて取り組んでいる。中でも地域コミュニティ¹⁾（以下、地域com）が関与することの有効性は、複数の論文で明らかになっているものの、地域comとの協働による活動は難しいとも言われている。そこで、本研究では以下の二点を明らかにすることを目的とする。
①活動団体と地域comとの関わりの必要性
②地域comとともに活動していく中での課題

【方法】

国土省の空き家モデル事業²⁾に令和元年から4年までに採択された近畿圏内の活動団体（12団体）にヒアリング調査を実施した。

【まとめ】

調査した12団体中3団体のみが地域comと活動を共にしており、9団体は共に活動していなかった。しかし、「地域comと活動を共にしたいか」との問いについて、全団体が共に活動したいと考えていた。

◆地域comと共に活動している団体

- 運営母体：空き家を専門に多い
- 対象地域：比較的狭い
- 地域への情報発信が容易
- 空き家や所有者の情報を有す
- 地域comとの関係性を継続するための高度なコミュニケーション能力を有する人員が必要

• 上記人材の確保が課題

◆地域comと共に活動していない団体

- 運営母体：土業が多い
- 対象地域：比較的広い
- 地域住民を対象に活動していても、情報発信が難しい
- 空き家や所有者の情報の取得が困難
- 人材の課題は見られない
- 本業の土業の信頼を得るためのアドバン

- テージとしての位置付けで活動している
- 地域が空き家に対する意識が低く、活動に対して消極的である場合、活動団体とともに活動したいと思い、アプローチしても協働に繋がらない

以上の分析結果から、今後は空き家の活動をより円滑にするためにも、行政の支援内容は、経済的・技術的支援だけでなく、地域comと活動団体をつなぐ役割や地域comと関わりを持つことができる信頼される人材育成の支援が必要である。空き家の抑制を担っているのはあくまで所有者で、所有者の意識を高めるためにも地域での空き家に関する意識醸成が重要で、そのためにも地域comとともに活動するための支援が今後必要になると考えられた。

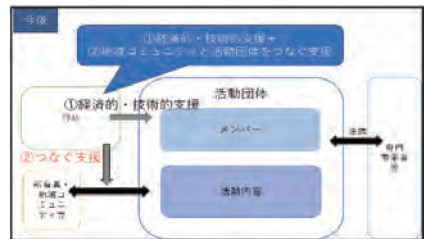


図1 今後の支援

← 連携 → 支援
①：現在も今後にも必要な支援、②：今後求められる支援

注釈

- 1) 地域コミュニティとは自治会はじめ、地域地縁組織や、地域住民等を指す
- 2) 「空き家対策モデル事業」NPOや民間事業者等の空き家対策に関する取組のうち、モデル性の高いものを支援することで、優良事例の蓄積と全国への横展開を図る事業

謝辞：本研究にご協力いただいた皆様に感謝申し上げます。



1970年までに民間開発された住宅団地に関する研究 －奈良県内の住宅団地を事例に－

増田 昌哉
Masaya Masuda

清水ゼミ

〈目的〉

戦後、高度経済成長期に開発された住宅団地において、現在様々な課題があり、特に民間によって開発された住宅団地では、基盤施設の整備水準が低いなど、ハード面に問題が残る住宅地の形成も少なくない。本研究では、平成30年に国土交通省が行った、「住宅団地の実態調査」を基に、1960年から1970年代にかけて、奈良県内で民間企業によって開発された住宅団地の現状と課題について明らかにすることで今後の住宅団地のあり方の示唆を得ることを目的とする。

〈方法〉

本研究では文献調査と実態調査の二つを行った。実態調査の概要は下記の表1の通りである。

表1 実態調査概要

調査対象	奈良県に所在している、1970年までに民間によって開発された住宅団地（西大和ニュータウン、閑屋北、東生駒、生駒台） 4市町村
調査方法	アンケート用紙の配布とヒアリング調査
調査時期	2023年11月、12月
調査概要	<ul style="list-style-type: none"> 所在地や入居開始時期、着工時期 開発当時と現在の都市計画区域、用途地域 事業手法・政策的な位置づけの有無 開発時と現在の上下水道の整備状況 上下水道、雨水管、道路などの所有者 市町村がかかえる対象地域の問題

〈まとめ〉

今回調査した事例を表2にまとめた。民間開発されたものであっても移管の際や、開発時に行政と連携されていた住宅団地ではさほどハード面の課題は見られなかった。一方、閑屋北の事例では89.4haの大きな住宅団地でありながら、旧法を根拠に市街化調整区域外のままで、下水道の整備もされていない。今後も閑屋北においては積極的な取り組みは計画されていないことがわかった。今後、立地適正化計画からも指定されないこのような住宅団地は、現状、閑静に見える住宅団地であっても今後、放置されていく可能性があり、大きな課題を孕んでいることは否めない。今回は奈良県の住宅団地を対象に調査を行ったが、こういった地域が全国的に存在することが考えられ、潜在的に問題を抱える住宅団地が今後ますます増えることが懸念される。市区町村の限られた財では対応に限界があると考えられるため、特に旧法を根拠に開発された住宅団地は、国としての対策が必要なのではないかと考える。

謝辞

本研究にご協力いただいたみなさまご協力いただき誠にありがとうございました。

表2 実態調査の比較

	東生駒		生駒台		西大和		閑屋北	
	開発時	現在	開発時	現在	開発時	現在	開発時	現在
都市計画区域内	○	○	○	○	×	○	×	×
政策的位置づけ	○	○	○	○	○	○	○	○
上水の整備	○	○	○	○	○	○	○	○
下水の整備	×	○	×	○	×	○	×	×
雨水管の整備	×	○	×	○	×	○	○	○
行政との連携	あり		あり		あり		なし	
住宅団地の課題 - 凡例 - ■ ハード面 □ ソフト面	<ul style="list-style-type: none"> 高齢化 コミュニティの弱体化 空き家などの増加 		<ul style="list-style-type: none"> 公共施設の段差 高齢化 コミュニティの弱体化 		<ul style="list-style-type: none"> 高齢化 少子化 大規模商業施設の閉鎖 		<ul style="list-style-type: none"> 下水道の未整備 市街化調整区域 積極的な整備が計画されていない 	



暑熱環境における快適な気流条件

松實 大智
Daichi Matsumi

東ゼミ

〈目的〉

昨年度の卒業研究(袴2022)で室温と好まれる気流との関係について、家庭用扇風機を用いて実空間にて調査した結果、室温30℃では快適性を得ることが難しいが、気流を当てる身体部位や方向を調節することで快適性が得られる可能性が示唆された。そこで、本研究では、快適性の得られる気流条件をさらに検討するために、温湿度を制御可能な人工気候室において風を当てる部位の自由度が高い小型扇風機を用いた被験者実験を行い、温熱生理心理反応の総合的な分析を通して好ましい気流を考察することとした。

〈方法〉

- ・被験者：健康な若年男子大学生10名
着衣量 0.3clo(半袖シャツ+短パン)
活動量 約1met(椅座安静)
- ・環境条件
室温：前室28℃・実験室30℃(50%RH)
- ・測定項目
皮膚温(額・腹・前腕・手背・大腿・下腿・足背の7点+冷えやすい部位：首・肩・足の腕・手の指先・ふくらはぎ・足首・足の指先+各自の冷える部位)計15点
主観申告(温冷感・快適感・許容度等)
- ・実験条件
条件1:高さ80cm 前からの気流
条件2:高さ30cm 前からの気流
条件3:高さ80cm 横からの気流
条件4:快適性を重視した自由設定
条件5:省エネ性を重視した自由設定

いずれも小型扇風機を使用し、風速は手元のポルトスライダーで10分毎に変更可能、条件4と5は扇風機の距離も自由設定とし、1～5の順で実施した。

- ・被験者近傍の気流は床上10cm, 40cm, 60cm, 80cm, 100cm, 120cmで計測した。
- ・実験期間 2023年9月上旬～中旬

各条件のスケジュールを表1に示す。

表1 実験のタイムスケジュール

時間	09:00	09:30	10:00	10:30	11:00	11:30	12:00
到着	入室	入室	入室	入室	入室	入室	入室
設定	設定	設定	設定	設定	設定	設定	設定
測定	測定	測定	測定	測定	測定	測定	測定
休憩	休憩	休憩	休憩	休憩	休憩	休憩	休憩
終了	終了	終了	終了	終了	終了	終了	終了

〈まとめ〉

実験条件ごとに設定する気流速度の傾向は異なり、条件2と3において個人差が大きい傾向があった。条件4(快適性重視条件)では、7名が前からの当て方を選択、3名が横からの当て方を選択した。

前からの気流を選択した被験者は、扇風機の高さを約40～80cm、距離は約50～80cmとし、気流速度は大半が約0.5m/sで個人差は少なかった。

横からの気流を選択した被験者は、扇風機の高さを約60～80cm、距離は約50～80cmとし、気流速度は約0.4m/s～0.5m/sで、前からの気流を選択した人よりやや低い傾向があり、平均で0.45m/sの気流速度に調節していた。

快適性重視条件における30分経過後の温冷感は、温熱的中立申告±1段階に10名中8名が入っており、残りの2名は「涼しい」と申告した。快適感については、全員が快適側で、不快側の評価をしている人はいなかった。この時のSET*は夏の快適範囲を満たしていた。

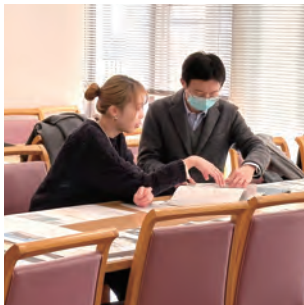
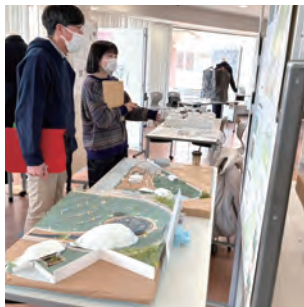
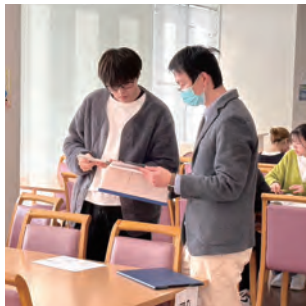
以上の結果より、気流を当てる部位を選択したうえで好みの気流速度を適宜自由に設定すれば、室温30℃の暑熱環境においてもある程度の快適性が得られるといえる。滞在時間が長くなる場合や性差の検討については今後の課題である。

謝辞：実験にご協力頂いた皆様、人工気候室の使用させていただいた武庫川女子大学 佐々尚美先生に感謝いたします。

講評会風景

2023年1月27日(土) なごみ食堂にて

2023年1月28日(日) なごみ食堂にて





選抜講評会

選抜講評会 2024年2月9日(金) P201講義室にて

学長賞 永井里歩

優秀賞 吉井亮徳

優秀賞 山崎優美





大卒業展 & 卒業生交流会

畿央大学 人間環境デザイン学科

会場 大阪市中央公会堂 中集会室 3階

2024年2月29日(木) 12:00 ~ 21:00

(交流会: 17:00 ~ 19:00 は学科教員全員が滞在)

3月1日(金) 10:00 ~ 17:00

20周年記念事業
特設サイト



Designed by 佐藤 結

たくさんのご来場、ありがとうございました。

大卒業展・卒業生交流会

2024年2月29日(木) 3月1日(金)
大阪府中央公会堂 中集会室にて





ゼミ集合写真



東ゼミ



林田ゼミ



清水ゼミ



陳ゼミ



前川ゼミ



藤井ゼミ



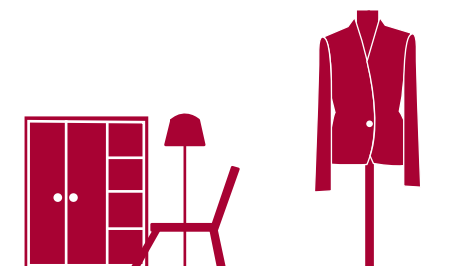
三井田ゼミ



村田ゼミ



李ゼミ



畿央大学人間環境デザイン学科では、現代社会のものづくりの基本となる「ユニバーサルデザイン」をテーマに、健康で心豊かに生活できる環境を創造する知識と技術の修得に取り組まれています。卒業制作展示会に参加し、「建築・まちづくり」、「インテリアデザイン」、「アパレル・造形」の各分野から提出された作品を拝見しました。公共施設や集合住宅、椅子、家具、ドレス、グラフィックアートなど多彩な卒業研究の作品には、使いやすさだけでなく、美しさと獨創性が表現されています。特に大阪市の歴史的建築物の活用や再利用、残糸を利用した布地の染色や被服の制作などを興味深く拝見しました。これらは4年間の学びの中で、多視点からデザインを考え、各自が試行錯誤のプロセスを経た問題解決の帰結が、卒業制作として結実したものと思います。

環境、建築、デザインの領域における総合的な造形教育を通じて、本学の建学の精神の一つである「美をつくる」を自ら身を持って体現しているのが、人間環境デザイン学科で学ばれた皆さんではないかと思えます。本学科で修得した造形に関する専門的な知識やその背景にある文化や諸科学についての総合的な教養を基盤として、今後ともより一層創造的思考を働かせ、日本と世界の文化の創造発展と社会に貢献して頂くことを心より祈念しております。

最後に、卒業までの間、親身にご指導頂いた先生方に感謝申し上げるとともに、今後とも卒業生を温かく見守って頂くことをお願いしまして講評とさせていただきます。

健康科学部長
植田 政嗣

卒業制作や卒業研究は大学4年間の集大成として満足のいくものが作り上げられたらどうか。結果は正直だ。迷った思考、向き合ったまなざし、悩み費やした時間などがよく表れる。その場はつくろえても、自分の心はごまかせない。

満足のできる成果が出せなかった諸君は、社会に出て、それぞれの道でがんばれ。世の中は君たちの活躍の場が無限に広がっている。

誠意をもって、不器用に生きよう。

かつて、松下村塾を巣立ち、維新の扉をこじ開けた若者たちを吉田松陰は次の言葉で送り出した。その言葉を君たちに送る。

至誠にして、動かざるものは、未だ之あらざるなり。

誠ならずして、未だ能く動かすものはあらざるなり。

人間環境デザイン学科 学科長
三井田 康記

開学20周年という記念の年に卒業の日を迎えるみなさん、ご卒業おめでとうございませう。

入学式もなく、仲間と相談する機会もないままオンライン授業漬けだった4年前。静寂に包まれた学び舎…あの時期を本当によく耐えました。卒業研究のために泊まり込みで作業する姿に触れて、最後にやっとデザイン学科らしい大学生活を送れたことに心より安堵しました。今回の卒業研究作品展は思い出に残るものになったことでしょう。どのような経験もチカラに変えるしなやかさを忘れず、自分の人生を生き抜いてください。母校よりずっと応援しています。

人間環境デザイン学科 主任
東 実千代

遂にこの日がやってきました。さらば諸君、さらば畿央大学。君たちが身につけた力と、君たちの幸福な未来を信じています。いつかまた、会いましょう。

……と、クールに締め括るつもりでいたのに、それができない。ずっと「正論を貫く厳しい先生でいよう」がモットーでしたが、いざこの時になって自分の中の別の気持ちに気がきました。そう、たぶん君たちを愛してしまい別れが辛くなってしまったのです。

ゼミ生たちから卒業のメッセージを貰いましたが、一人が「すぐ飲みに行きましょう」と書いてくれました。もしや、「また」を「すぐ」と書き違えたのかも知れませんが、真に受けます。

「いつかまた」や「相談ができれば」でなく、「いつでも」「どんな時でも」君たちの誘いを待っています。思い出話や未来の話しや四方山話を肴に、一献傾けましょう。

ありがとう。この4年間、そしてこの17年間は、僕の二度目の青春でした。

藤井 豊史

講評

皆さんは入学して、コロナの非常事態宣言によりキャンパスへの登校ができなくなり、授業や学生との面談もオンラインで行うことになりました。最初は「この学年は比較的物静かな学生が多いのかな」と感じていました。しかし、対面授業が再開され、卒業研究が始まると、ゼミ室は活気に満ち溢れました。廊下で熱心に作業をする学生たちの姿を見て、私の心も熱くなりました。

「人生は短距離走の連続」というのが私の座右の銘です。

小さな目標を一つずつ達成すると、そのことが大きな夢につながると信じています。その過程で、人との出会いや受けるアドバイスが、新たな挑戦への扉を開くことが多々あります。挑戦することを恐れずに前進していく勇気を持ち続けてください。また、学生時代に築いた友情や経験は、一生の宝となるでしょう。自分の選んだ道を信じ、一步一步進み続けてください。

応援しています。

村田 浩子

先日、テレビで、「奄美大島の泥染め」を見ました。淡々と泥染めを行うその人は、「太陽・土・山・海・風などの自然に、私は少しだけ手を加えます。私は自然の一部です。」とっていました。

4月から皆さんは社会人ですね。でも、社会の中であまり頑張りすぎず、時々「人間環境デザインって何?」と、ぼうっと考えてみてください。そして、自分が自然の一部であることを感じてください。きっと余計な力が抜け、仕事も人間関係もうまくいくことでしょう。

みなさんのこれからが、健康と笑顔に包まれた日々であることを祈っています。

林田 大作

2020年4月に入学した皆さん、4年間の大学生活、大変お疲れ様でした。誰も経験したことのないコロナ禍の3年間を遅く乗り越えられた皆さんにエールを送ります。それぞれの思いで就職活動とともに卒業研究に臨み、4年間の集大成として出来上がったモノはこれからの社会人としてもお仕事に活かされることと思います。より一層のご活躍をお祈りします。卒業おめでとうございます。いつも陰ながら応援しています。

李 沅貞

入学以来、世の中は不確実で混沌とした時間が流れ、皆さんも多くの制限や困難に直面してきたことと思います。しかし、皆さんの研究や作品からは、この4年間、予想もできない事態に対応しつつ、物事の本質を見抜き、怯まずやり抜く力をものにした姿が見えました。

世界は今後ますます多様化していくことでしょう。生き抜く力を着実に身につけてきた自信を胸に、目一杯挑戦し続けてください。これからもずっと応援しています。

清水 裕子

卒業研究では、皆さんは今までの学びや経験によって、初めて自主的にテーマを選んで、自分が関心のある課題に真剣に取り組んでいたでしょうか。この世界に対する疑問や不満があり、「正解」を探求し続けたでしょうか。結局自分が満足できる「正解」が出来ても、出来なくても、その経験は必ず心の糧になると思います。常に身近な生活の「空間」や「もの」を考え直し、地域社会の環境のあり方を探求し続けてほしいです。これからも、皆さんの成長と活躍を楽しみにしています。

陳 建中

モノの見かたとして、狼の視点と鳥の視点の2つがあります。狼の視点は、地上で物事を間近に、様々な角度から捉える方法。一方の鳥の視点は、高く上空から全体を眺め、周囲との関係から捉える方法。前者は主観性や固有性が、後者は客観性や一般性が重視されます。今回の卒業研究を通じて、自分が狼人間なのか鳥人間なのかなんとなくわかったと思います。

重要なことはどちらかの視点に偏ることなく、その2つの視点を行き来することです。主観的なものから如何に普遍的なものを見つけるか、一般的と見えるものから如何に固有性を見出すか、この思考が大事だと思います。どうぞ楽しい人生を送って下さい！

前川 歩

4年間、本当に…本当に良く頑張りましたね。

華のキャンパスライフ。皆さんが高校時代に描いていたものとは、違う局面が多々あったことでしょう。コロナさえなければ…従来なら…という思いが、私もずっと心にありました。しかし、制限が緩和されてから、学内で友人同士からかい合う姿や卒業研究に没頭する姿を間近に見られ、私も嬉しく温かい気持ちになったことを覚えています。

この4年間で柔軟に過ごした皆さんなら、今後遭遇するであろう人生の波も乗り越えられるはずです。自信をもって!!これからもずっと応援しています。

中井 千織

はじめの一步がなかなか踏み出せず、石橋を“これでもか”と叩いて渡るように慎重に、丁寧に、卒業研究を進めたみなさん。それでも一步一步着実に前進する姿は、入学当初からは想像も出来ない程成長していました。私にとってみなさんは、四年間の成長を初めて見届けることができた特別な学年です。みなさんにとっても、畿央大学で過ごした時間が特別なものであれば嬉しいです。春からは、今までより少しだけスピードを上げて、活躍してくれることを願っています。みなさんの先生として、そして先輩として、母校畿央大学よりいつまでも応援しています。

小松 智菜美

畿央大学 健康科学部
人間環境デザイン学科 教員

教授

学部長 植田 政嗣
学科長 三井田 康記
主任 東 実千代
藤井 豊史
林田 大作
村田 浩子

編集委員

中井 千織
小松 智菜美
佐藤 結

お手伝い

2回生
3回生

准教授

李 沅貞
清水 裕子
陳 建中

講師

前川 歩

助手

中井 千織
小松 智菜美

以上

「卒業制作・論文作品集」18

2024年3月13日発行

発行 畿央大学

健康科学部 人間環境デザイン学科

代表 学長 冬木 正彦

〒635-0832 奈良県北葛城郡広陵町馬見中 4-2-2

印刷 株式会社 明新社